よ　そ　みや

会所宮遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第11集

1996

日田市教育委員会

よ　そ　みや

会所宮遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第11集

1996

日田市教育委員会

A区の空中写真（北から）

C区の空中写真（真上から）

序　　文

本市には数多くの埋蔵文化財が残っていて、とくに近年では日本最古の豪族居館跡として注目を集めました小迫辻原遺跡や、弥生時代の有力者の甕棺墓が発見された吹上遺跡など重要な遺跡の調査が相次いで行われています。

今回報告いたします会所宮遺跡に近い会所山は、古くから景行天皇巡幸や古代日田の豪族鳥羽宿禰の伝承地としても知られてきたところで、歴史的にも由緒ある土地であります。

そうした意味におきましても、３次にわたって行なってまいりました会所宮遺跡の発掘調査において、各時代の遺構や遺物の発見がありましたことは、大変意義深いことであります。

このたび発行する本書が、今後の郷土史解明のため、また日田市の教育・文化の普及、啓発にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたってご指導を賜りました諸先生方や、ご協力をいただきました地元の皆様方をはじめ関係者の方々に対し、心より感謝を申し上げます。

平成８年12月28日

日田市教育委員会教育長　加藤正俊

例　　言

1．本書は日田市都市計画街路城町高瀬線道路改良事業に伴う会所宮遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書には日田市教育委員会が平成２・４・７年度の３ケ年に実施した発掘調査の成果をまとめている。

3．調査地点については平成２年度調査をＡ区、平成４年度調査をＢ区、平成７～８年度調査をＣ区としている。

4．調査にあたっては、市都市計画課や地元の方々のご協力を得た。

5．また、調査中には小田富士雄（福岡大学教授）・後藤宗俊（別府大学教授）両先生方の現地指導をいただいたほか、真野和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）、渋谷忠章・高橋徹（大分県教育委員会）、小倉正五（宇佐市教育委員会）氏らのご指導をいただいた。

6．遺構および遺物の実測・製図、写真撮影は調査担当者が行ったほか、今田秀樹（現天瀬町教育委員会）、井上正隆・大城徹也・稲嶺真紀江・柳田晴子（琉球大学）ら学生のご協力を得た。

7．また、空中写真については平成２年度は空中写真企画、平成７年度はスカイサーベィによる撮影で、遺物の写真撮影は長谷川正美氏の撮影によるものである。

8．本書の執筆は調査担当者が分担して行い、編集については土居・行時・永田が協議して行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経過 ……（土居）… 1
　1．調査に至る経過 ……（土居）… 1
　2．調査組織 ……（土居）… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……（行時）… 4
Ⅲ　調査の内容 ……（土居・行時・永田）… 6
　1．Ａ区の調査 ……（土居）… 6
　2．Ｂ区の調査 ……（行時）…10
　3．Ｃ区の調査 ……（永田）…17
Ⅳ　まとめ ……（土居・行時・永田）…38
付　鳥羽塚古墳について ……（土居）…39

挿　図　目　次

第１図　会所宮遺跡の調査区位置図（１／3.500）…… 2
第２図　日田盆地の主要遺跡位置図（１／30.000）…… 5
第３図　Ａ区の遺構配置図（１／160）…… 6
第４図　１号溝と柵列の実測図（１／80）…… 7
第５図　１号溝と柵列の断面実測図（１／80）…… 8
第６図　１号溝の土層断面実測図（１／40）…… 8
第７図　１号溝出土の遺物実測図（１／３）…… 8
第８図　２号溝の実測図（１／80）…… 9
第９図　Ｂ区の遺構配置図（１／300）と調査区壁面の土層実測図（１／120）11～12
第10図　土坑の実測図（１／30）…… 13
第11図　１号溝の実測図（１／100）…… 14
第12図　２号溝の実測図（１／100）…… 15
第13図　Ｂ区出土の遺物実測図（１／３）…… 16
第14図　Ｃ区の遺構配置図（１／300）…… 17
第15図　１号竪穴住居の実測図（１／60）…… 18
第16図　土坑の実測図１（１／30）…… 19
第17図　土坑の実測図２（１／30）…… 20
第18図　１号土坑出土の土器実測図（１／３）…… 23
第19図　２号土坑出土の土器実測図（１／３）…… 24
第20図　３号土坑出土の土器実測図１（１／３）…… 25
第21図　３号土坑出土の土器実測図２（１／３）…… 26
第22図　３号土坑出土の土器実測図３（１／３）…… 27
第23図　３号土坑出土の土器実測図４（１／３）…… 28
第24図　４号土坑出土の土器実測図（１／３）…… 28
第25図　６号土坑出土の土器実測図（１／３）…… 29
第26図　７号土坑出土の土器実測図（１／３）…… 30
第27図　８号土坑出土の土器実測図（１／３）…… 30
第28図　10号土坑出土の土器実測図（１／３）…… 30
第29図　１号溝の実測図（１／80）…… 32
第30図　１号溝出土の土器実測図（１／３）…… 33
第31図　２号溝出土の実測図（１／３）…… 33
第32図　５・６溝出土の土器実測図（１／３）…… 33
第33図　10号溝の実測図（１／80）…… 33
第34図　10号溝出土の土器実測図１（１／３）…… 34
第35図　10号溝出土の土器実測図２（１／３）…… 35
第36図　10号溝出土の土器実測図３（１／３）…… 36

第37図　Ｃ区出土の石器実測図１（１／３）　…… 37
第38図　Ｃ区出土の石器実測図２（１／３）　…… 37
第39図　鳥羽塚古墳の位置（１／5.000）と昭和29年の測量図（１／100）　…… 39
第40図　鳥羽塚古墳出土の遺物実測図（１／３）　…… 40

写　真　図　版　目　次

巻頭図版　Ａ区の空中写真（北から）
　　Ｃ区の空中写真（真上から）

図版１　Ａ区の空中写真（真上より）／１号溝と柵列の空中写真（真上より）
　　１号溝の発掘状況（東より）
図版２　２号溝の発掘状況（東より）／Ａ区の調査風景（北より）
　　１号溝の出土遺物
図版３　Ｂ区の全景（南より）／１・２号土坑の発掘状況（東より）
　　３号土坑の発掘状況（南より）／４号土坑の発掘状況（南より）
図版４　５号土坑の発掘状況（南より）／１号溝の発掘状況（西より）
　　Ｂ区の出土遺物
図版５　Ｃ区の調査風景（南より）／Ｃ区の全景（南より）
　　１号竪穴住居の発掘状況（東より）／１号土坑の発掘状況（南より）
図版６　２号土坑の発掘状況（東より）／３号土坑の発掘状況（西より）
　　３号土坑の発掘状況（南より）／３号土坑の発掘状況（南より）
図版７　４号土坑の発掘状況（東より）／５号土坑の発掘状況（南より）
　　６号土坑の発掘状況（西より）／７号土坑の発掘状況（西より）
図版８　８号土坑の発掘状況（東より）／１・２号溝の発掘状況（北より）
　　５・10号溝の発掘状況（南より）／調査風景（南より）
図版９　１号土坑の出土土器／２号土坑の出土土器
　　３号土坑の出土土器
図版10　３号土坑の出土土器
図版11　３号土坑の出土土器／６号土坑の出土土器
　　７号土坑の出土土器／８号土坑の出土土器
　　１号溝の出土土器
図版12　１号溝の出土土器／10号溝の出土土器
図版13　10号溝の出土土器
図版14　Ｃ区の出土石器／鳥羽塚古墳の現況写真（北西より）
　　同古墳出土の土器

Ⅰ 調査の経過

1．調査に至る経過

調査原因となった都市計画街路城町高瀬線道路改良事業は、国道210号線若宮町と県道戸畑日田線田島町を南北に結ぶ総延長680mの補助幹線道路として昭和44年に事業の計画決定がなされ、昭和56年から事業が着手された。

昭和62年には市都市計画課から市教育委員会へ計画区域内にあたる会所山の工事工法に関する協議書が提出され、協議の結果会所山には遺跡が存在し、景観を配慮した工事を望む市民の声があることからトンネル工法で工事を進めることとなった。この時、路線内の埋蔵文化財調査についても協議を行い、道路計画区域内には遺跡が存在する可能性があることから、工事の進捗に合わせて順次試掘調査を行い、遺跡が発見された場合は発掘調査を行うこととした。

また、平成６年には当初よりさらに北へと路線が延長され、東部中学校横までの総延長916mに変更された。この変更に伴い埋蔵文化財調査についても、継続した試掘調査等を行うこととした。以下、都市計画街路城町高瀬線第一期事業期間内における調査経緯の概略をまとめる。

（昭和61年度）会所宮山の南側の工事に先立ち田島遺跡の試掘調査を行ったが、弥生土器片が出土したものの遺構が確認されなかったため工事を許可した。

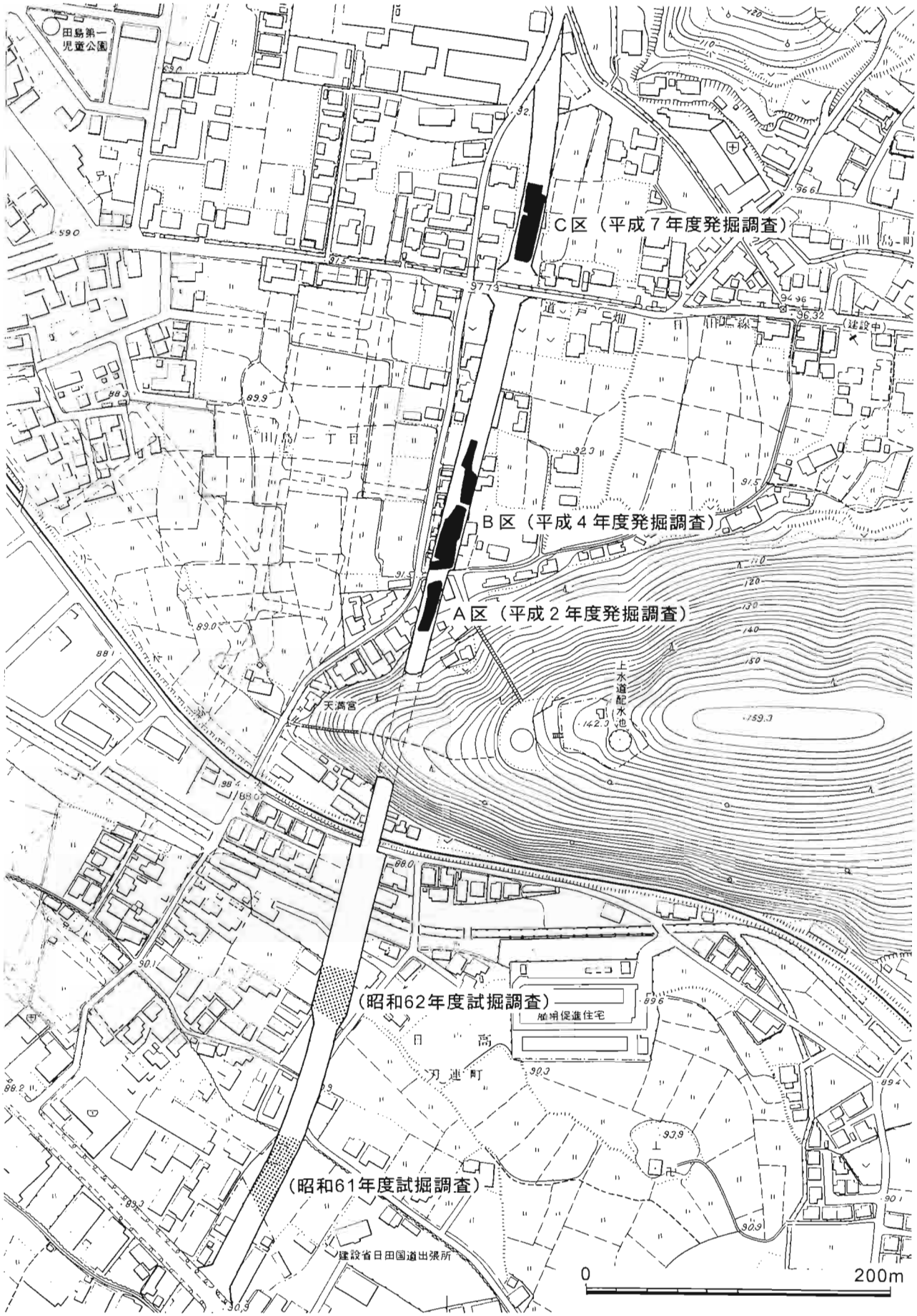
（昭和62年度）前年同様に田島遺跡の試掘調査を行ったが、摩耗した土器片が少量出土したのみで、遺構が確認されなかったため工事を許可した。

（平成２年度）試掘調査を平成元年12月16日に実施し、遺物や遺構の発見があったため、発掘調査を次年度に実施することとなった。発掘調査は平成２年６月21日から開始したが、調査期間中は雨が多く現場に雨水が溜まることがしばしばで、作業はスムーズに進まなかった。７月末には遺構が掘り上がり、７月30日に空中写真撮影を行い、８月６日には全ての現場作業が終了した。また、遺物の整理作業は７月２日から９月18日までの間行った。

（平成４年度）この年の調査は工事区域がＡ区の続きとなるため、遺跡の存在することが予想されたので試掘調査を行わずに、発掘調査を平成４年５月６日から開始した。この調査区は路線内にあってレベル的にも最も低い場所にあたるため、雨が降れば現場が水没し、排水処理におわれることがしばしばであった。このため、遺構の密度が稀薄であるにもかかわらず、調査期間は長期におよんだ。５月27日には測量、写真撮影など現場作業が全て完了した。整理作業は７月１日から７月31日まで実施した。

（平成7･8年度）平成６年の路線変更に伴い延長された区域の試掘調査を平成８年１月19日に行い、弥生土器の出土と弥生時代の溝などの遺構が確認されたため、引き続き３月11日から発掘調査を開始した。調査では現場に水が湧きその対応に苦慮したが、23日にはほぼ遺構が掘り上がった。24日には小田富士雄・後藤宗俊両先生の来訪があり、28日に空中写真撮影を行った。４月８日には測量・写真撮影が終了し、全ての調査作業を完了した。整理作業は平成７・８年度の２ケ年行った。

なお、昭和61・62年度の試掘調査の概要については、日田市教育委員会『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅱ・Ⅲ（1987・88年）に所収している。



第１図　会所宮遺跡の調査区位置図（１／3.500）

２．調査組織

各年度ごとの調査における組織は次のとおりである。なお、職名は当時のままとしている。

（平成２年度）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　楢原芳彦（日田市教育長）

調 査 事 務　重石巧（日田市立博物館館長）、小埜サダ子（同主任）

調 査 担 当　土居和幸（同学芸員）

調　査　員　行時志郎（同学芸員）、森山敬一郎（同嘱託）

作　業　員　秋ヤエコ、浅木フミコ、石井寿一、石井正吉、石田八千代、諫山摂子、伊藤スミコ、大坪レイコ、桑野チズエ、江田昭雪、財津朱美、財津利枝、瀬口カオル、高瀬茂晴、田中静香、橋本サダエ、松本ミツコ、宮本律子

（平成４年度）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　楢原芳彦（日田市教育長　～11月14日）、加藤正俊（日田市教育長　11月27日～）

調 査 事 務　原田良伸（日田市立博物館館長）、阿部正義（同次長）、佐藤裕子（同臨時職員）

調 査 担 当　行時志郎（同学芸員）

調　査　員　土居和幸（同学芸員）、森山敬一郎（同嘱託）

作　業　員　浅木智恵子、浅木フミコ、諫山摂子、石井寿一、石松京子、一ノ宮八千代、宇佐伊和夫、川原ミネ子、久住猛雄、江田昭雪、相良ヒロ子、財津朱美、財津利枝、柴尾千鶴子、白土スミ子、鷹野百合子、高瀬茂晴、田中静香、柚木ユキエ、森山マルコ

（平成７・８年度）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育長）

調 査 事 務　原田良伸（日田市教育委員会文化課課長　～平成8年3月31日）、 原田俊隆（同課長　平成8年4月1日～）、 財津寅日出（同課長補佐兼文化財係長　～平成8年4月14日）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長　平成8年4月15日～）、森山一宏（同主任　平成8年4月15日～）、佐々木美保（同臨時職員　～平成8年3月31日）、衛藤和美（同臨時職員　平成8年4月1日～6月30日）、竹原里香（同臨時職員　7月1日～ ）

調 査 担 当　永田裕久（同主事補）

調　査　員　土居和幸（同主任）、行時志郎（同主事）、森山敬一郎（同嘱託）

作　業　員　秋吉タミエ、伊藤フジエ、猪熊スミ子、猪熊忠孝、猪熊誠、猪熊ヨネ、梅木鈴子、小野敦、梶原みとし、河原直美、木下カネ、黒木千鶴子、江田美代子、坂本今朝人、坂本都美子、佐藤節子、島田けさみ、高村笑美子、田中静香、谷頭忠雄、手嶋トシエ、益永勇、毛利四郎三、森川實夫、山本タケ、横尾テル子、横尾真知子、和田ケイ子

Ⅱ　遺跡の立地と環境

日田盆地は、前期鮮新世末の英彦山火山岩・釣鐘山火山岩、一尺八寸山安山岩の火山活動によりその基盤が造られ、その後更新世になり耶馬渓火砕流、阿蘇４火砕流により盆地の埋積が行われ、ほぼ現地形が形成されている。現在はそこから河川の浸食などによる開析過程となっている。地形面は高位から一尺八寸山緩斜面、耶馬渓火砕流台地面、阿蘇４火砕流堆積面、中位段丘、低位段丘、沖積面へと続いている[1]。

会所宮遺跡は阿蘇４火砕流堆積により形成された元宮原台地一帯から浸食によって西へ向かって広がる扇状地一帯にある。遺跡の周辺には法恩寺山古墳群をはじめ著名な遺跡が密集しているが、会所宮遺跡では主に弥生時代から中世にかけての遺構が確認されており、したがって関係する時代ごとに日田盆地の主要な遺跡を概観する。

弥生時代の遺跡としては、日田盆地を取り巻く台地上に吹上遺跡、小迫辻原遺跡、朝日宮ノ原遺跡、後迫遺跡、佐寺原遺跡、上野遺跡などが存在し、また沖積地においても徳瀬遺跡、平島遺跡、三和教田遺跡などが発見されている[2]。とくに吹上遺跡では平成７年度の調査で計11基の甕棺墓や木棺墓などが発見され、中からは銅剣、銅戈などの青銅器や貝輪、玉類などが出土し、日田盆地の首長墓として注目されている[3]。

古墳時代の遺跡としては、古墳時代前期の豪族居館が発見された小迫辻原遺跡[4]をはじめ、平島遺跡や長者原遺跡、西有田赤ハゲ遺跡などの集落遺跡が知られ、また墳墓としては盆地周辺の丘陵上などに多数の古墳が散在する。会所宮遺跡周辺においては、調査区南側丘陵上に鳥羽塚古墳あり、この丘陵の小谷を挟んで対峙する南側の丘陵上には装飾壁画古墳として知られている３号墳をはじめとする計７基からなる古墳時代後期の群集墳、法恩寺山古墳群が存在している[5]。また会所宮遺跡を挟んで北側の丘陵上には、古墳時代中期の円筒埴輪を出土した市内最大級の円墳である薬師堂山古墳が存在するほか、丸尾神社古墳や石蓋土壙墓群が調査された赤迫遺跡などが近接する。

古代の遺跡としては、小迫辻原遺跡や上野第１遺跡で奈良時代の官衙風配置をとる掘立柱建物群が発見されている[6]ほか、竪穴住居跡を主体とする集落遺跡では手崎遺跡や長者原遺跡、石ヶ迫遺跡などで確認されている。

中世の遺跡としては、溝で区画された中に建物をもつ屋敷が発見された小迫辻原遺跡をはじめ、水田遺構や集落跡が発見された荻鶴遺跡[7]、水路跡が発見された郷四郎遺跡[8]、木棺墓の中から中国の鏡や輸入陶磁器類が出土した朝日宮ノ原遺跡[9]、経塚が発見された吹上遺跡などがある。

1)千田昇「日田・玖珠地域の地形-とくに台地地形について-」『日田・玖珠地域-自然・社会・教育』大分大学教育学部 1992

2)土居和幸「第二章 弥生時代」『日田市史』日田市 1990

3)土居和幸・永田裕久編『吹上遺跡』―6次調査の概要―日田市教育委員会 1995

4)土居和幸編『小迫辻原遺跡』日田市教育委員会 1993

5)賀川光夫編『法恩寺山古墳』日田市教育委員会 1959

6)田中裕介編「上野第1遺跡」『一般国道210号日田ﾊﾞｲﾊﾟｽ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大分県教育委員会 1991

7)行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995

8)松下桂子編『郷四郎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第10集 日田市教育委員会 1996

9)友岡信彦・土居和幸「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土壙墓」『おおいた考古』2号 大分県考古学会 1989

1．会所宮遺跡
2．鳥羽塚古墳
3．会所山古墳(北向古墳)
4．元宮原遺跡
5．東寺原遺跡
6．法恩寺山古墳
7．東寺横穴墓群
8．柳ノ本遺跡
9．牧原遺跡
10．手崎遺跡
11．惣田遺跡
12．惣田塚古墳
13．陣ヶ原遺跡
14．上野遺跡
15．姫塚古墳
16．護願寺古墳群
17．徳瀬遺跡
18．村前遺跡
19．荻鶴遺跡
20．薬師堂山古墳
21．丸尾神社古墳
22．丸山古墳
23．慈眼山瀬戸口遺跡
24．慈眼山戸頃遺跡(大蔵古城跡)
25．佐寺原遺跡
26．夕田横穴墓群
27．月隈横穴墓群
28．吹上横穴墓群
29．吹上遺跡
30．北友田横穴墓群
31．羽野横穴墓群
32．後迫遺跡
33．草場第二遺跡
34．小迫辻原遺跡
35．朝日宮ノ原遺跡
36．天満1・2号墳
37．日隈古墳
38．後山古墳

第2図　日田盆地の主要遺跡位置図(1/30,000)

Ⅲ　調査の内容

1．Ａ区の調査（第３図）

調査区は会所宮山丘陵の北側山麓の標高約91ｍから93ｍの傾斜地にあたる。工事計画では約 525㎡が調査の対象となっていたが、対象地南側の山裾が民家を建てる際に掘削していたこともあり、遺跡の保存状況の良いと思われる対象地北側の約250㎡に限った調査を実施した。

調査では溝２条、柵列１、柱穴多数などの遺構を検出したが、第４図に図示している柱穴には近世以降のものが含まれている。

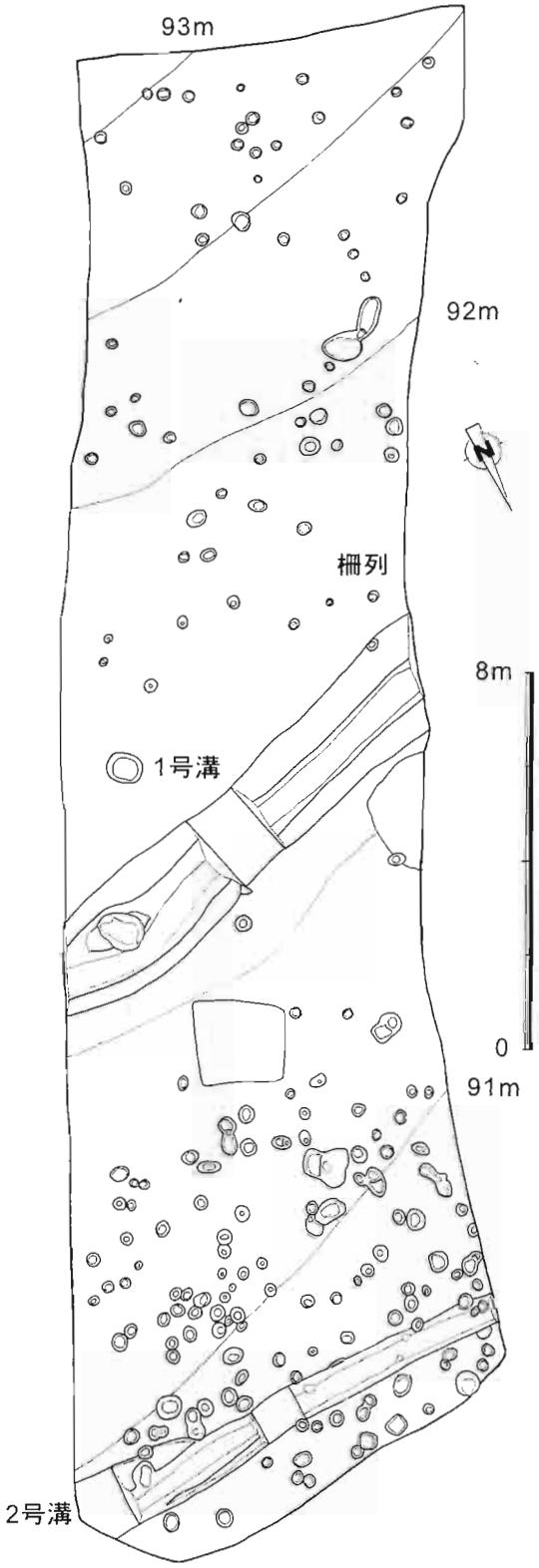
溝（第４～８図）

１号溝（第４～６図）

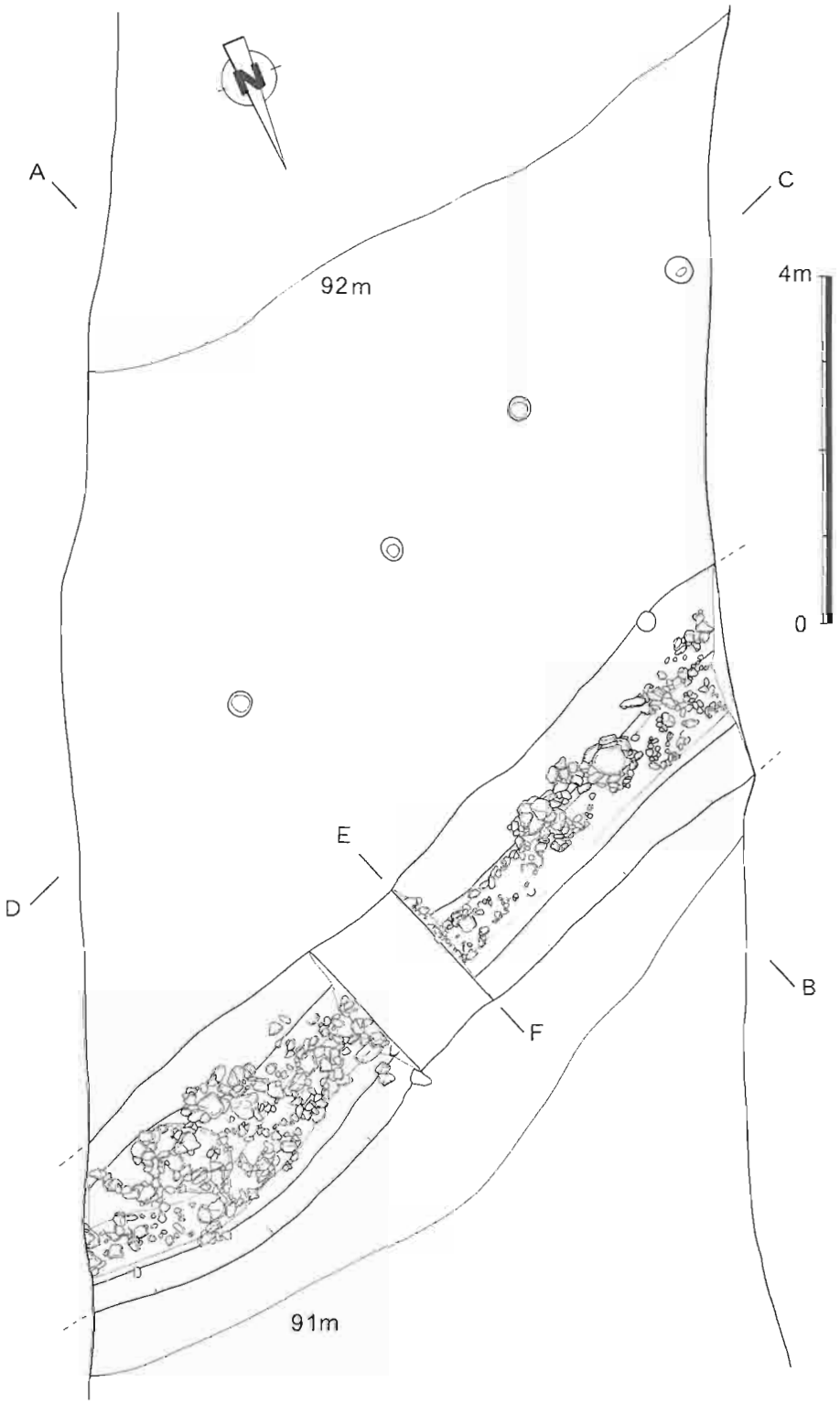
調査区の中央で検出した長さ9ｍ90㎝、幅は上面が１ｍ70㎝～２ｍ32㎝、底面が42㎝～60㎝の規模の溝で、等高線に沿うようにほぼ直線的に東西方向へと走る。溝の断面は逆台形を呈し、深さは１ｍ10㎝～１ｍ26㎝を測る。

溝の土層堆積状況は第６図に示す通りである。Ⅰ層は暗黒茶褐色土で、５～20㎝ほどの多くの風化礫を含む。Ⅱ層は地山土が混じる明黒茶褐色土で、Ⅰ層同様に風化礫を含む。このⅠ・Ⅱ層には遺物を含む。Ⅲ・Ⅳ層は地山土で、風化礫を含まず、遺物も少ない。こうした状況から溝の埋土は風化礫や遺物を含む上層（Ⅰ・Ⅱ層）と、風化礫を含まず遺物も少ない下層（Ⅲ・Ⅳ層）の２層に大別できる。上層は溝の廃棄後の埋土である。

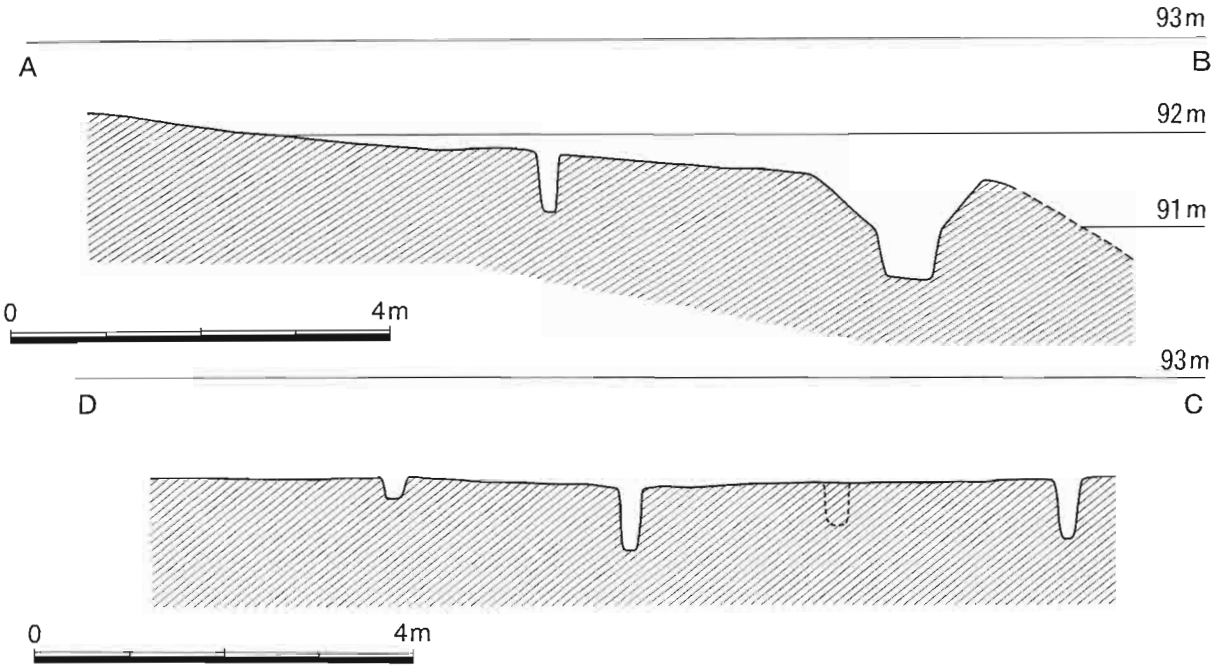
遺物は上層から集中して出土しているが全体的に少量で、小破片が多く完形品となりえる資料はない。遺物は土師器の小皿・坏、青磁、白磁、土錘、鉄刀などが出土し、石鏃、弥生土器、甕や坏などの須恵器、甑などの土師器、鉄鏃などの弥生・奈良時代の遺物が混入している。また溝の中の風化礫については、溝の両端の断面中にも観察することができ、調査範囲内に限った堆積でないことが判る。



第３図　Ａ区の遺構配置図（１／160）



第4図　1号溝と柵列の実測図(1／80)

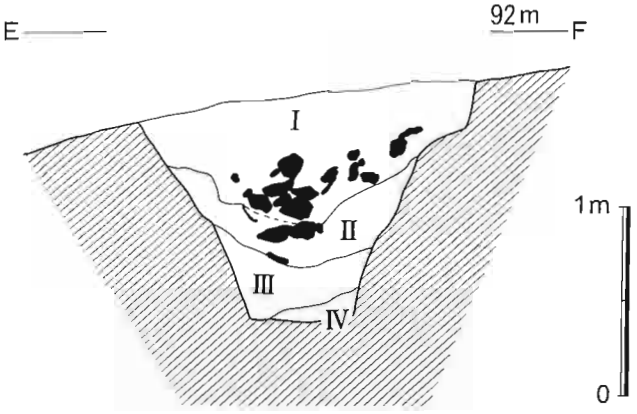


第５図　１号溝と柵列の断面実測図（１／80）

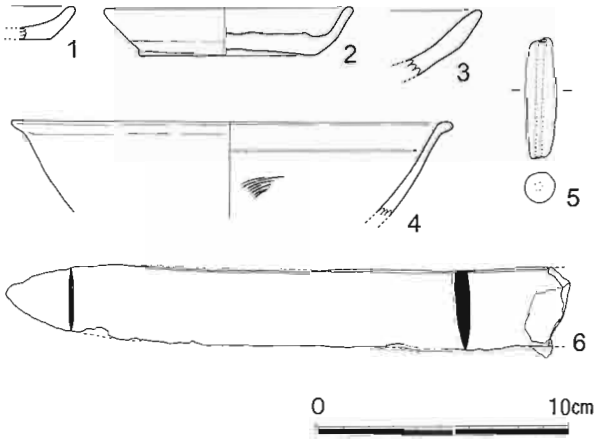
出土遺物（第６図）

１・２とも土師器の小皿片である。１は下層から出土したもので、摩滅が著しく調整は不明である。法量は器高1.3㎝。２は１に比べ法量が大きい。内外面ともナデ調整で、底部は糸切りである。法量は口径10㎝、底径７㎝、器高1.6㎝～2.1㎝。３は土師器の坏で、やや内傾する口縁部片である。摩滅が著しく調整は不明である。４は白磁椀の口縁部片である。口縁部は外反し、丸みを帯びた端部は水平である。体部の内面上部には沈線が施され、櫛花文が描かれている。乳白色の釉がかかる。法量は口径17.5㎝。５は土錘で、長さ4.8㎝、最大径1.2㎝。６は鉄刀片で、現存する長さ22.4㎝を測る。切先は両刃で、先端から約4.5㎝のところから棟がみられ、わずかに反る。幅は３㎝、厚さは５㎜ほどである。

このほか、図示はしていないが青磁片なども出土している。



第６図　１号溝の土層断面実測図（１／40）

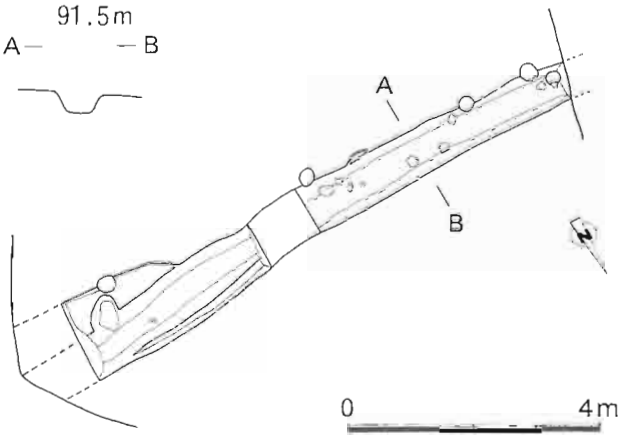


第７図　１号溝出土の遺物実測図（１／３）

２号溝（第８図）

調査区を等高線に沿って東西方向に横切る溝で、長さ８m80cm、幅は上面が64cm～95cm、底面が25cm～46cmである。溝の断面は逆台形を呈し、深さは24cm～40cmを測る浅い溝である。

溝の中からは風化礫に混じって、摩滅の著しい土器片が少量出土している。



第８図　２号溝の実測図（１／80）

柵列（第４・５図）

１号溝の南側約４mの位置で検出した東西方向に並ぶ柱穴４つからなる。他にみられる柱穴に比べて深さがしっかりしており、建物となりえる柱穴の存在が確認できないことから柵列とした。１号溝と並行し、埋土も類似することから、１号溝に伴う柵列と考えられる。柱間は3.3 m～3.75mを測る。

小結

１号溝の年代であるが、溝の中からは第６図に図示できる程度の遺物しか出土していない。唯一、完形品に近い第６図２の土師器小皿をみてみると、底部は糸切りであるので太宰府編年では12世紀以降にあたる。法量が口径10cm、器高1.6 cm～2.1 cmを測ることから、山本編年[1]では小皿ａのＸ～XV期の範疇に含まれ、底部が糸切りであることを考えるとXIII～XV期に該当しそうである。白磁椀は太宰府分類[2]のＶ類４・ｂに該当し、その出現が11Ｃ中頃以降であることから、溝の時期は概ね12Ｃ中頃～後半頃と考えられる[3]。

次に、溝の性格であるが、調査区東側約350 mには産八幡と呼ばれる場所に湧水地点がある。この溝が東へと延びる様相を呈することから、水路の可能性が考えられる。しかし、溝の底には水を排した痕跡を示す鉄分などが見られず、溝が等高線に沿って掘削されている点など水路の機能とは考えがたい。また、集落に関連する溝と想定するにしても遺物の量は少なく、北側（Ｂ区）では集落遺構が確認されておらず、南側は傾斜地という立地から積極性に欠ける。丘陵に沿うように柵列を伴い、遺物も少ない状況を考慮すると、この溝は会所山丘陵上の何らかの遺構に付属する施設と推定される。溝と同時期かどうかは不明であるが、丘陵上では土師器の採集がなされており、少なくとも何らかの遺構が存在する可能性がある。今後の周辺や丘陵上の調査に期待したい。

なお、２号溝については年代を特定できる土器がないため、不明である。

1）山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文刊行会　1990年

2）横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館研究論集４』　九州歴史資料館　1978年

3）ここでは太宰府編年に対比させてみたが、土師器小皿の法量については弥勒寺ＳＫ－３やＳＫ－５にも該当することを考慮すればその年代は溯る可能性もある。今後検討が必要であろう。（小倉正五・高橋徹氏よりご教示いただいた。）

2．B区の調査

B区はA区の北側に隣接する。調査は道路工事予定区域の南端について下水道工事を先に実施する予定であることから協議を行い、この区域の調査を先行して行った後、全面調査を開始した。調査では、工事予定地の中央に水田用として使用中の水路が調査区を横切っていたため、表土剥ぎ作業はこの水路を残して実施した。調査では下水道工事に伴う区域をB区、道路工事に伴う区域で水路より南側をB－1区、北側をB－2区として便宜状区分したが、本報告では調査区域はすべてB区として扱っている。調査の結果、ここからは現代の溝を含め溝が5条、土坑6基のほか中世の水田跡とみられる包含層などが検出されている。以下、各遺構ごとに説明を加える。

土坑（第10・13図）

1号土坑（第10図）は調査区南端部で検出された。平面は隅丸長方形プランを呈する。規模は長軸1m75cm、短軸1m06cm、深さ38cmを測る。床面は東部へ向かってやや深くなっている。壁面は、北側が緩やかに立ち上がり、その他はやや急な立ち上がりをみせる。出土遺物は礫に混じって土師器片などが数点出土したが、時期は不明である。

2号土坑（第10図）は1号の西側に隣接して検出された。平面は長方形に近いプランを呈し、東西両端に段を有する。規模は長軸92cm、短軸67cm、深さは39cmを測る。床面はほぼ平坦となっている。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物はわずかに土師器片などが出土している。

3号土坑（第10図）は2号の約2m西側で検出された。平面は歪な方形に近いプランを呈する。規模は長軸1m、短軸94cm、深さは27cmを測る。床面は南西部へ向かってわずかに傾斜している。壁面はやや緩やかな立ち上がりとなる。遺物の出土はない。

4号土坑（第10図）は3号の約2m南西側で検出された。南は調査区外にかかる。平面は円形に近いプランを呈する。規模は最大長1m39cm、深さは24cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、北部へ向かってわずかに傾斜している。壁面はほぼ垂直にたちあがる。遺物は中世の土師質土器片が数点出土している。

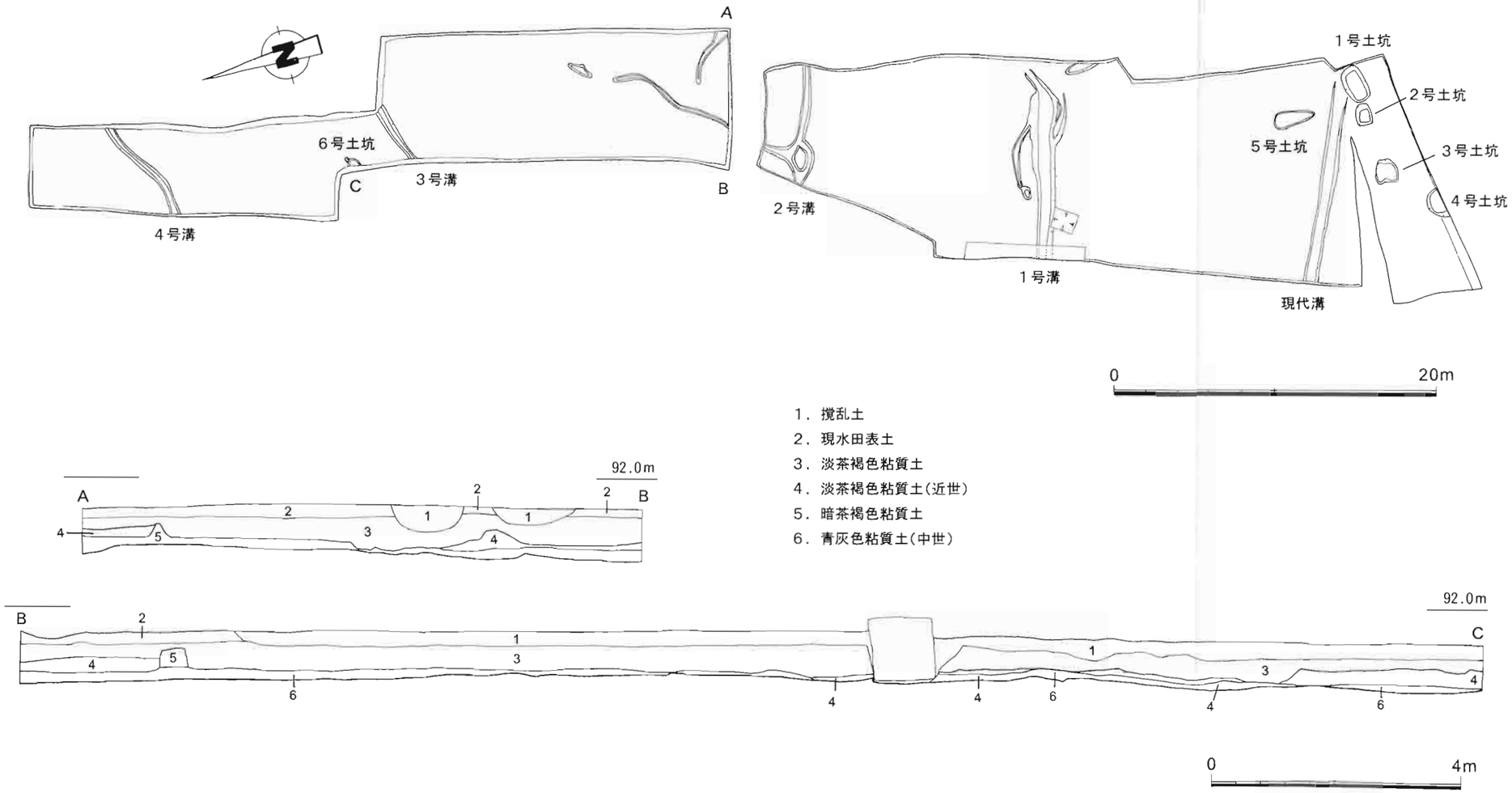
5号土坑（第10図）は1号の約2m北側で検出された。平面は北側が広く、南側に向かって狭くなる楕円形に近いプランを呈する。規模は長軸2m51cm、短軸1m03cm、深さは26cmを測る。床面はほぼ平坦となっているが南に向かってわずかに傾斜している。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

6号土坑（第10・13図）は調査区の北側、3号溝の北側にあり、西は調査区外にかかる。平面は円形に近いプランを呈する。規模は最大長54cm、深さは21cmを測る。床面は東に向かって、深くなっている。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は石器が1点出土したが土器の出土はない。

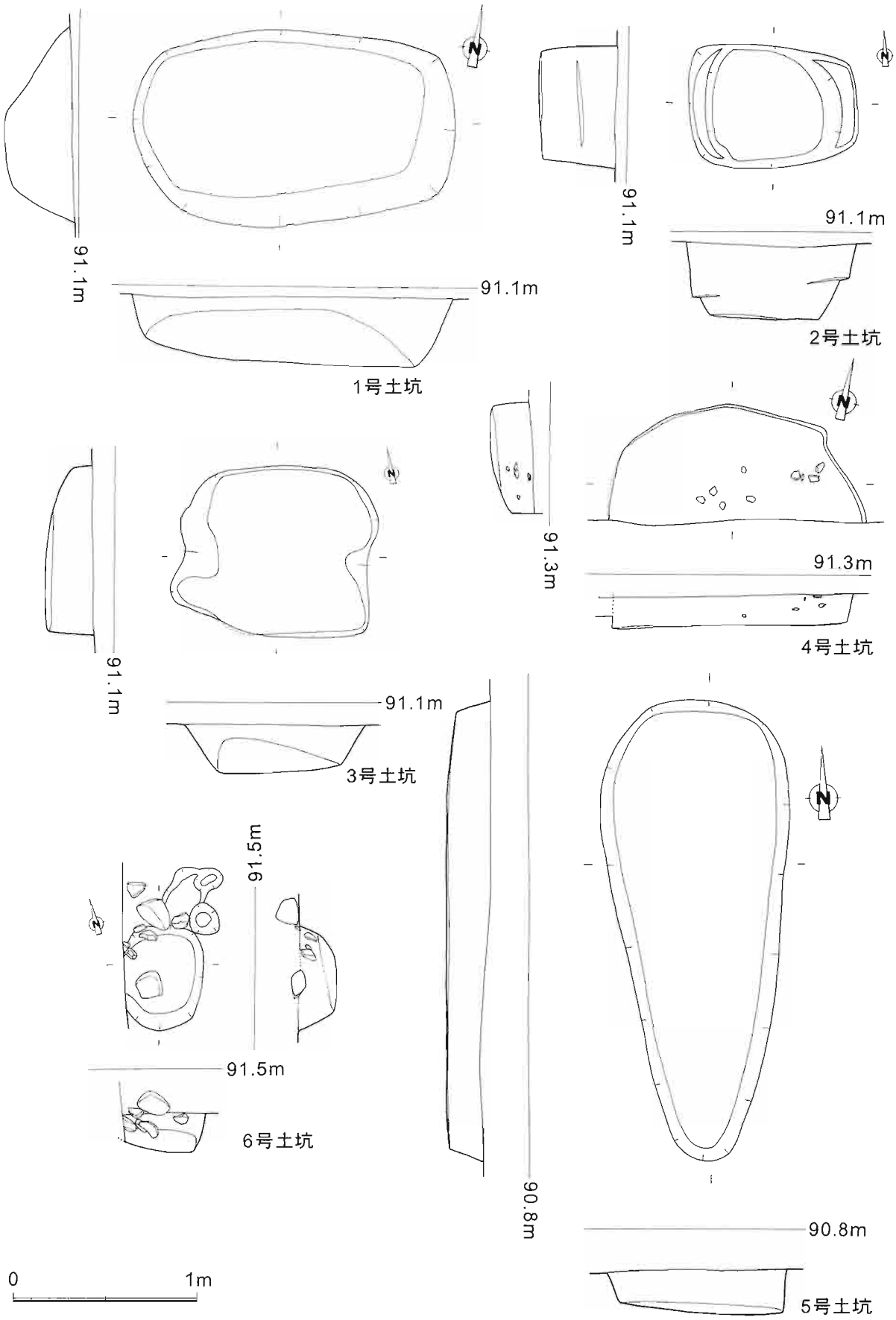
16は打製石斧である。先端部がわずかに当初の形状を残す以外は大部分が欠損している。残存長12.1cm、残存幅6.5 cm、最大厚1.6 cmを測る。石材は安山岩である。

溝（第11～13図）

1号溝（第11・13図）は調査区を東西に分断するが、東部は削平されている。 溝の南東に別の溝がみられるが、これは状況からこの溝の枝溝と考えられる。 溝は残存長11m30cm、幅は最大で約



第９図　Ｂ区の遺構配置図（１／300）と調査区壁面の土層図（１／120）



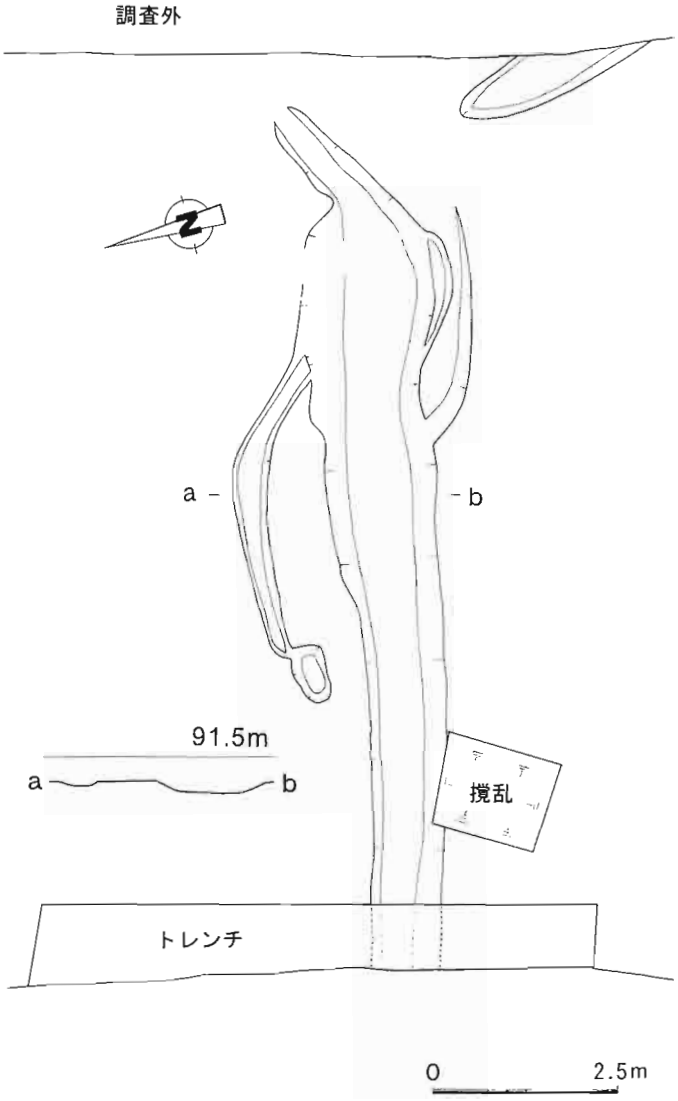
第10図　土坑の実測図（１／３０）

1ｍ50cm、深さ約20cmを測る。溝の埋土は砂質土で、水路または流路と考えられる。レベルから東から西方向へ流れていたと推測される。溝の中からは、ほぼ完形に近い土師器の甕などが出土した。

1～4は甕の破片である。1はほぼ完形品で口縁部を「く」の字に外反させ、胴部は肩が張る。器表面は摩滅が著しいが、内面はヘラ削りの痕跡が見受けられる。口径11cm、器高14.9cm、胴部の最大幅15.6cmを測る。2・3は口縁部の破片、4は胴部片である。5は壺の口縁部である。大きくラッパ状に開き、胴部はやや肩の張るタイプになろう。6は壺のミニチュアである。1～6の胎土はすべて角閃石、長石、石英を含む。

2号溝(第12・13図)は1号より北13ｍ50cmの位置にある。北と東方向から延びてきたA，B2つの溝は、調査区のほぼ中央で合流する。Aは残存長約14ｍ40cmを測る。またCは東から西方向に向かい、途中でとぎれるが、埋土の状況や方向から、本来Aと繋がっていたと推測される。これらの溝の幅は、合流する地点で約50cm、それ以外では平均20cm、深さは合流する地点で約30cmを測る。埋土は暗灰色砂質土で1号とほぼ同様である。溝の中からは数点土器が出土している。

7は土師器の口縁部片である。口縁端部はわずかに内湾気味に細長く延びる特徴を持つ。同じ溝からは薄手のタタキを持つ甕の胴部片が出土しており、古式土師器の範疇に入ると考えられる。胎土は角閃石、長石、石英を含む。



第11図　1号溝の実測図（1／100）

3号溝(第9・13図)は2号より北11ｍ40cmの地点にある。溝の埋土は1・2号とよく類似している。溝の方向はやや蛇行しながら東西方向に延びる。

17は打製石斧である。左側部がわずかに当初の形状を残す以外は大部分が欠損している。残存長11.5cm、残存幅6.5 cm、最大厚1.8 cmを測る。石材は安山岩である。

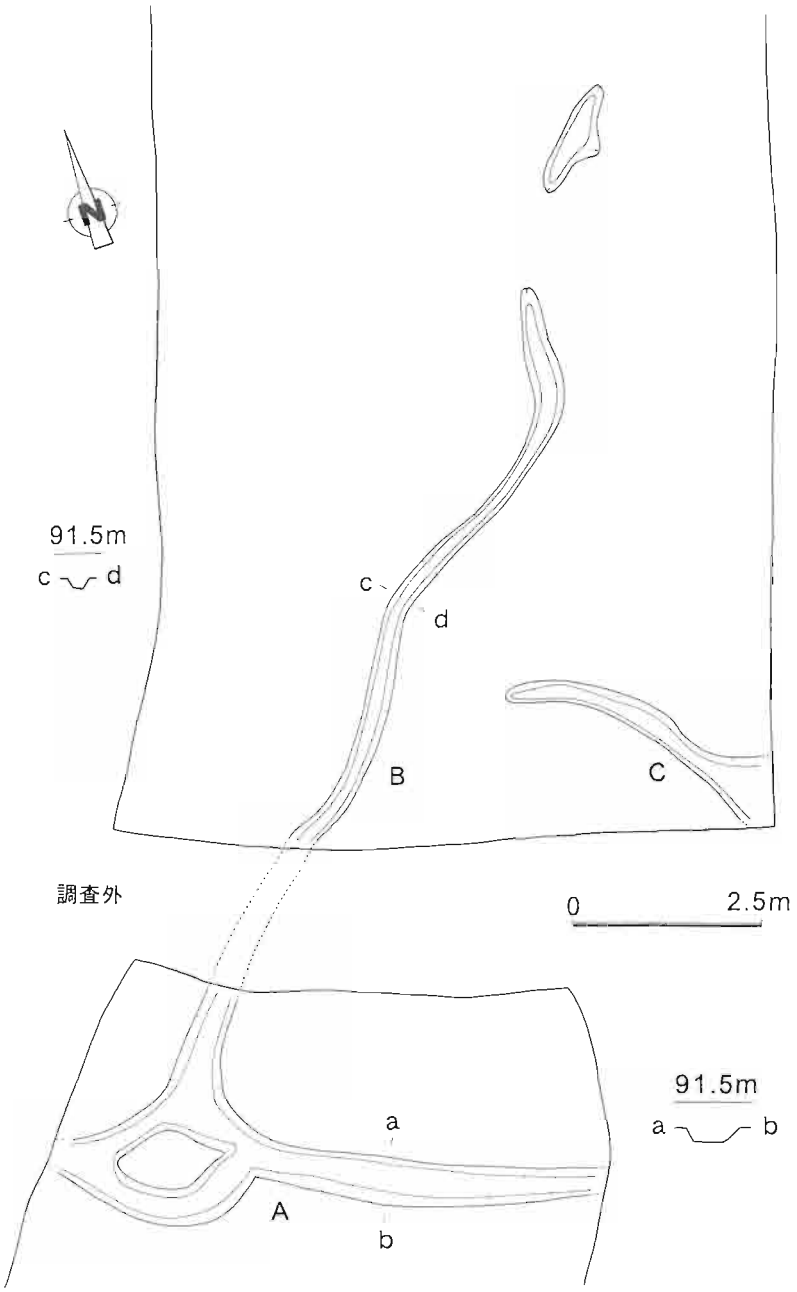
4号溝(第9・13図)は3号と同じ方向に向き、3号より北13ｍ70cmの位置にある。溝の埋土は3号同様荒い砂がまとまって入り、溝の方向もやや蛇行しながら延びることから流路と推測される。

8は深鉢である。内外面黒褐色を呈し、口縁端部よりやや下った位置に凸帯を巡らす。器形はこれよりわずかに下に稜が入り、内側へ屈曲する。口縁部の復元径は22.8 cmを測る。胎土は角閃石、長石、石英を含む。弥生時代前期前半の所産である。18は打製石斧である。先端を欠損するほかはほぼ完形である。長さ15.5 cm、幅8.6 cm、最大厚1.5 cmを測る。石材は安山岩である。

包含層（第９・13図）

北側の調査区では青灰色をした包含層が検出された。調査区の北壁や西壁で観察した土層からは、その中に地山から台形状に立ち上がった黄灰色の粘質性を帯びた層が確認されており（第９図）、これが畦畔であるとすれば包含層は水田であった可能性がある。

９～11は縄文土器である。９は三万田式の特徴を持つ深鉢である。口縁部は内湾し３条の沈線が入る。復元口径33cmを測る。10は口縁端部と底部を欠損しているが、屈曲の方向から晩期の浅鉢となろう。11は深鉢の底部である。底径8.2 cmを測る。９～11の胎土はいずれも角閃石、長石、石英を含む。12・13は須恵器の坏身である。12は６世紀後半の所産で口径11cmを測る。13は８世紀の所産で復元底径9.3 cmを測る。14は黄緑色を呈する中国龍泉窯系の複弁鎬蓮弁文青磁碗片である。復元口径14.4cmを測る。鎬がしっかりしており、13世紀代の所産と推測される。15は土師器皿である。底部は糸切りと推測される。復元底径7.4 cmを測る。

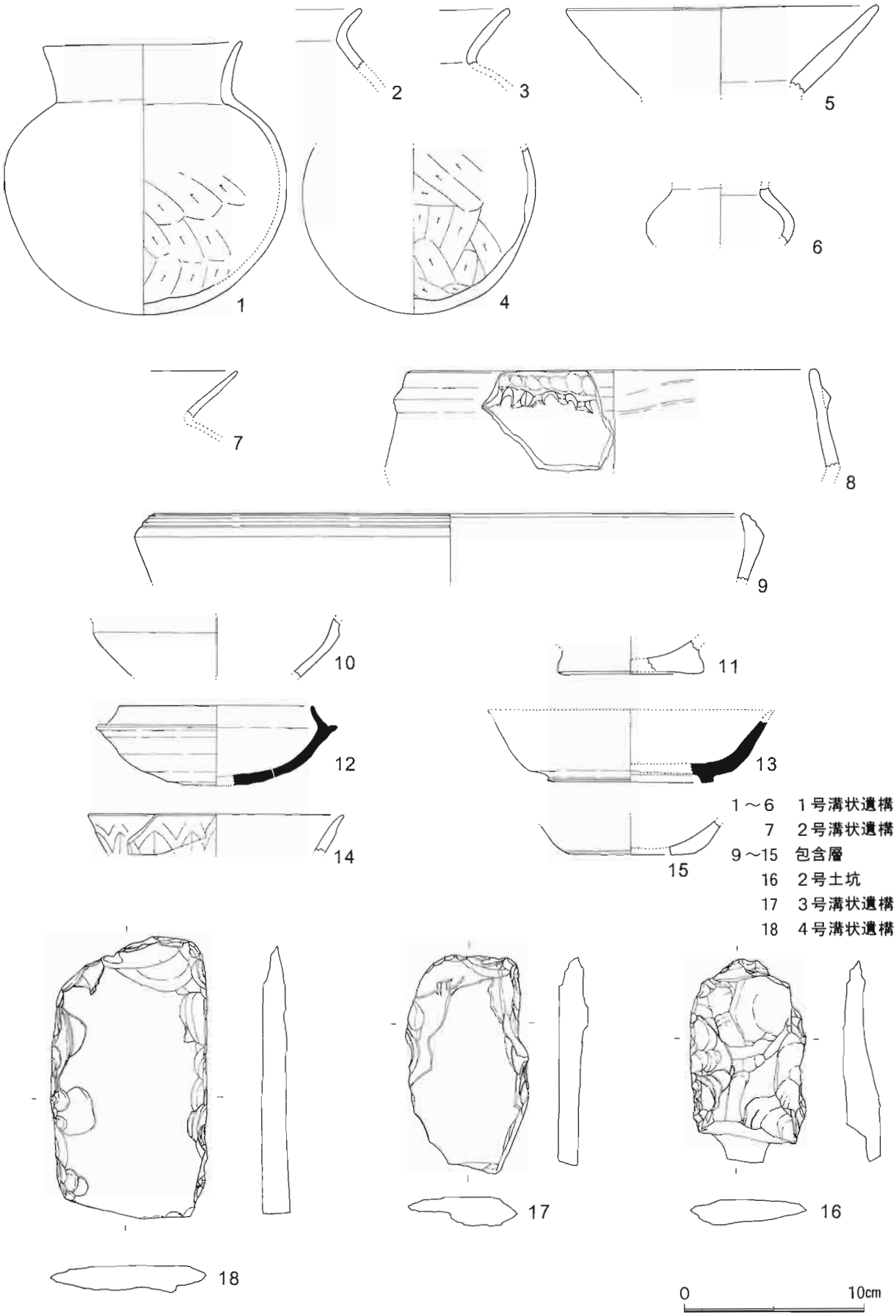


第12図　２号溝の実測図(1/100)

小結

Ｂ区では土坑と溝が検出された。土坑はいずれも時期が不明であるが、溝からはいずれも土器が出土しており、１号は古墳時代中期、２号は弥生時代終末から古墳時代初頭、３、４号は縄文時代晩期末から弥生時代前期前半にそれぞれ比定される。中でも４号溝から出土した刻目突帯文土器は、晩期の深鉢が形式変化したもので、土器形式の影響が強い。これまで日田市内での調査事例をみると、弥生時代前期後半には盆地を取り巻く台地上に稲作に関連する大陸系磨製石器や板付Ⅱ式土器を伴う集落が出現することが確認されている。今回発見されたこの土器は、日田地域での縄文時代晩期から板付Ⅱ式にいたる土器相を考える上で注目され、今後資料の増加を待って検討する必要があろう。

1）坂本嘉弘編『菅生台地と周辺の遺跡Ｘ』竹田市教育委員会　1986



第13図　B区出土の遺物実測図（1／3）

3．C区の調査

この調査区は道路工事の計画延長にかかる区域で、約750 ㎡の調査を実施した。調査地点は谷状地形の基部にあたり、周辺に比べやや低い位置に存在している。調査では主要遺構として竪穴住居跡１軒、土坑10基、溝９条が確認されている。以下遺構ごとに説明を加える。

１号竪穴住居（第15図）

調査区の北側において検出した。遺構は床面まで削平をうけているため柱穴しか確認できていない。柱穴は計14個が円周状に配置されている。柱穴間は最大で南北６m40cm、東西５m60cmを測る。確認面からの柱穴の深さは15cm～26cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

土坑（第16・17図）

１号土坑（第16図）

北側が攪乱をうけている。長方形の平面プランを呈しており、その規模は南北約１m30cm＋α、東西約１m、深さ約45cmを測る。遺物は甕・壺が流れ込みの状況で出土した。

出土土器（第18図）

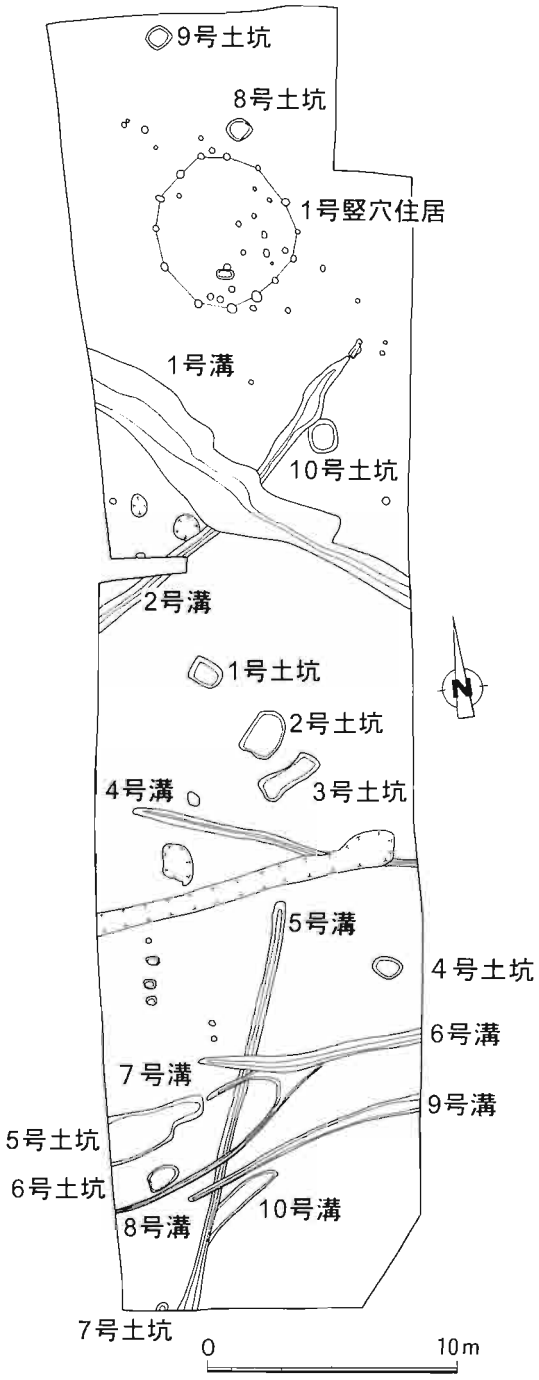
１～８は甕である。１は復元口径33cm。口縁は「く」字形を呈し外面に刷毛が残る。２は復元口径29cm。如意形口縁下に１条の三角突帯がつく。３～８は甕の底部である。上げ底で外面には刷毛が残る。９は壺の底部で底径7.4 cmを測る。外面は箆磨き、内面に指頭痕が残る。胎土に長石･石英･角閃石を含む。

２号土坑（第16図）

長方形の平面プランを呈し、その規模は南北約１m30cm、東西約１m50cm、壁面は緩やかに立ち上がり深さ約15cmと浅い。遺物は甕・壺、石器が床から浮いた状態で出土した。

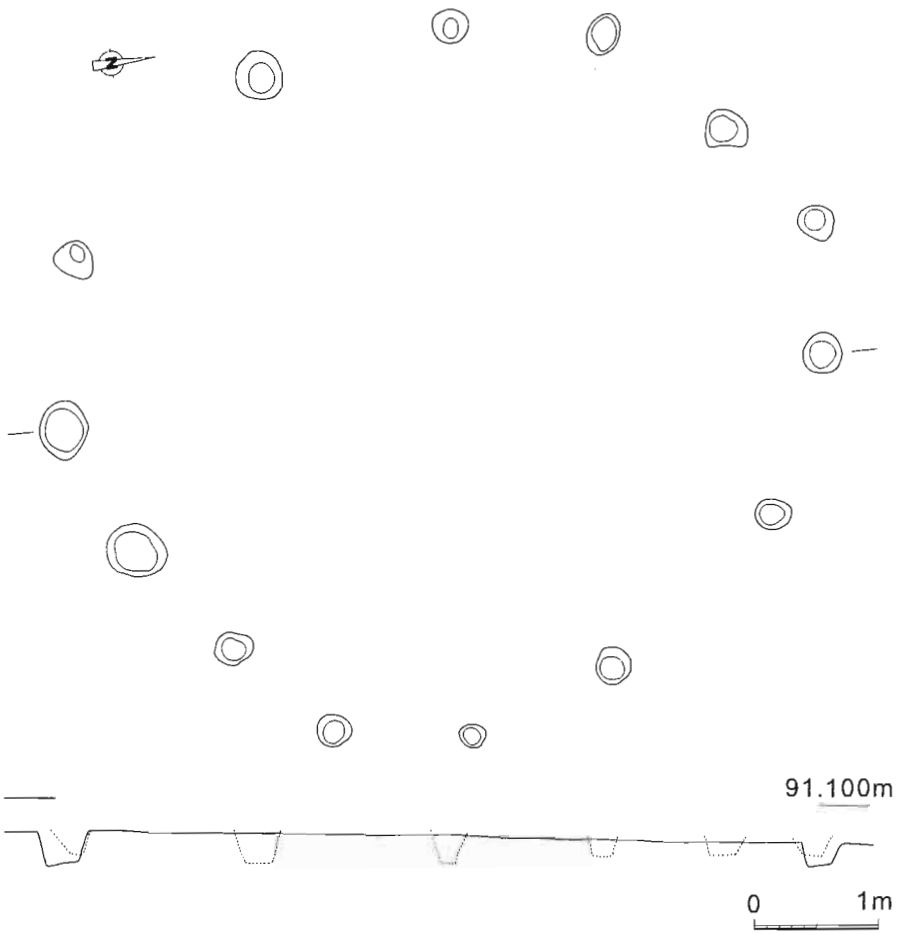
出土土器（第19図）

１～７は甕である。口縁はすべて逆Ｌ字形。１は復元口径32cm。２は復元口径27.2cm、口



第14図　Ｃ区の遺構配置図(1/300)

縁下に沈線が１条巡り、外面に刷毛が残る。３は復元口径 32.6cm、口縁下に三角突帯が１条巡る。外面に刷毛、内面に指頭痕が残る。４は復元口径 29.4cm、口縁下に三角突帯が１条巡る。５は復元口径27.6cm。６は上げ底で底径5.6 cmを測る。外面は刷毛。７は上げ底で底径８cm。外面は刷毛。８は広口壺の完形品である。口縁部は短く外反しており、胴部は強く張る。底部は不安定な平底である。最大径は胴部の上位にある。口径27.2cm、器高31cm、底径６cm、胴部最大径は30cmを測る。



第15図　１号竪穴住居の実測図（１／60）

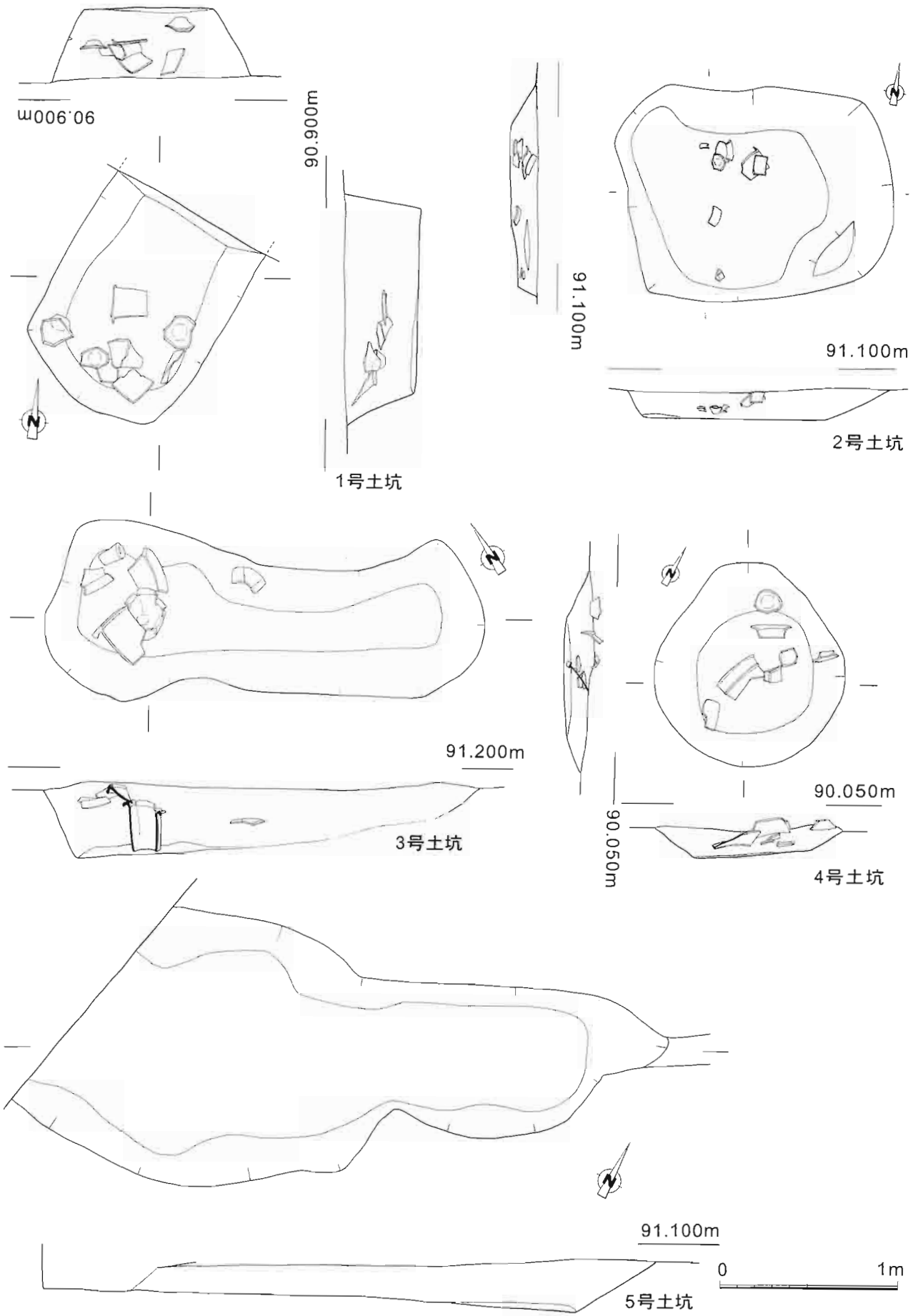
３号土坑（第16図）

不定形な平面プランを呈しており、規模は東西２m50cm、南北約95cm、深さ20～60cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がる。遺物は甕・壺・器台が床からやや浮いた状態で出土した。

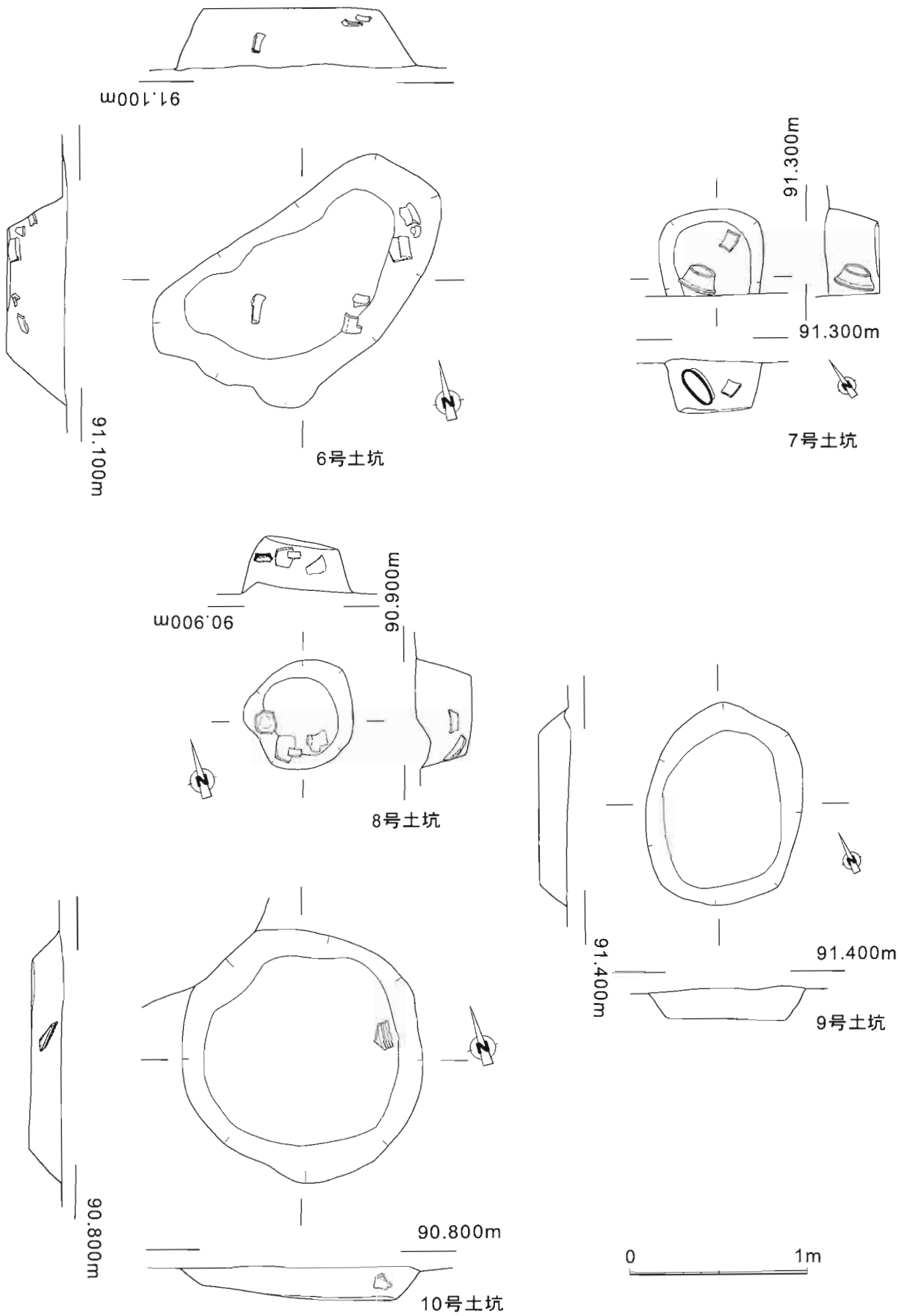
出土土器（第20～23図）

１～16は甕である。１は復元口径48cmを測る大型の甕である。逆Ｌ字形の口縁下に１条の三角突帯が巡る。２は復元口径35cm。口縁下に１条の三角突帯が巡る。外面は刷毛、内面に指頭痕が残る。３は復元口径33.4cm。４は復元口径30cm。２・３・４ともに逆Ｌ字形の口縁下に１条の三角突帯が巡る。５は復元口縁26.6cm。鋤先形口縁で、外面に刷毛が見られる。６は復元口径27.6cm、胎土に金雲母を含む。７は復元口径26.4cm、外面に刷毛が残る。８は復元口径28.2cm、胎土に金雲母を含む。９は復元口径28cm。６・７・８・９ともに逆Ｌ字形の口縁を有する。10は復元口径29.2cm、口縁部は鋤先形をなす。11は復元口径25cm、鋤先形口縁の外面に刷毛による調整が残る。12は完形品で、逆Ｌ字形の口縁下に１条の三角突帯が巡る。口径17cm、器高16.3cm、底径12cmを測る。

13は上げ底で底径７cm、外面に刷毛が残る。14は厚つめの底で底径7.4 cmを測る。胎土に金雲母を含む。15は上げ底で底径6.6 cm。胎土に金雲母を含む。16は上げ底で底径７cmを測る。17～25は壺である。17は大型壺の口縁部のほぼ完形品である。復元口径48.8cm、器高24.4cm口縁部はやや垂下する



第16図　土坑の実測図１（1／30）



第17図　土坑の実測図２（1／3）

鋤先形で、頸部には三角突帯が２条巡る。頸部外面に横方向の刷毛が見られる。18は復元口径26.2㎝を測る。口縁部は鋤先形をなす。19は復元口径23.6㎝を測る。口縁部は鋤先形をなし、内面に横方向の篦磨きが残る。20はほぼ完形品で、口縁部は逆Ｌ字形をなし胴部には１条の三角突帯が巡る。口径27㎝、胴部最大径は27.4㎝を測る。21は復元口径24㎝。逆Ｌ字径の口縁部をなす。22は復元口径26.8㎝。短く外反する素口縁をもつ。23は復元口径28㎝。逆Ｌ字形の口縁部をなす。24は平底で底径７㎝、外面に篦磨きが残る。胎土に金雲母を含む。25は平底で底径6.6 ㎝を測る。26は器台で底径９㎝を測る。27は器台で底径9.4 ㎝を測る。26・27ともに外面に刷毛が残る。胎土は長石・石英・角閃石が含まれる。

４号土坑（第16図）

楕円形の平面プランを呈し、南北約１ｍ５㎝、東西約１ｍ15㎝の規模を測る。深さは約15㎝と浅い。遺物は甕・壺が床面から浮いた状態で出土した。

出土土器（第24図）

１は甕で復元口径24㎝。逆Ｌ字形の口縁下に三角突帯が１条巡る。外面に刷毛、内面には指頭痕が残る。２～６は壺である。２は復元口径32㎝、口縁部は鋤先形をなす。３は復元口径18㎝。４は復元口径18㎝。３・４ともに口縁部は逆Ｌ字形をなす。５は平底で底径9.9 ㎝を測る。６は平底で底径は10㎝である。外面には刷毛のほか指頭痕が残る。胎土は長石・石英・角閃石を含む。

５号土坑（第16図）

土坑の西側は調査区外へとのびる。不定形な平面プランを呈しており、その規模は南北約85㎝～1ｍ60㎝、東西約3ｍ5㎝、深さ約15㎝を測る。土坑内からは土器等の遺物は出土していない。

６号土坑（第17図）

不定形な平面プランを呈しており、南北約１ｍ15㎝、東西約１ｍ35㎝、深さ約37㎝の規模である。遺物は甕・壺・器台が床面から浮いた状態で出土している。

出土土器（第25図）

１は甕で復元口径26.4㎝。口縁部は鋤先形をなし、外面には刷毛が残る。２は壺の胴部で最大径は23.2㎝。3は器台である。復元口径7.4 ㎝、器高12.4㎝、底径8.4 ㎝を測る。外面に刷毛が残る。

７号土坑（第17図）

調査区の南端に位置する。土坑の南側は調査区外へとのびる。円形の平面プランを呈しており、その規模は南北約47㎝＋α、東西約55㎝、深さ約30㎝である。遺物は甕・壺が床面より出土した。

出土土器（第26図）

１・２・６～８は甕である。１は復元口径29㎝、逆Ｌ字形の口縁部を呈し、外面に刷毛の痕跡を残す。２は復元口径24.4㎝、逆Ｌ字形の口縁下に１条の三角突帯が巡る。外面刷毛、内面に指頭痕を残す。６は底部で底径7㎝、外面に刷毛が残る。７は平底で底径8㎝、外面は篦磨き、内面は刷毛と篦磨きが残る。８は底部で底径6㎝、外面刷毛、内面に指頭痕が残る。３～５は壺である。３は復元口径29㎝。４は復元口径26.4㎝で、ともに鋤先形の口縁をなす。５は広口壺の素口縁で、口

径28cmを測る。胎土は長石・石英・角閃石および赤色粒を含む。

8号土坑（第17図）

ほぼ円形の平面プランを呈しており、南北約61cm、東西約60cm、深さ約30cmの規模を測る。遺物は甕・壺が床面から浮いた状態で出土している。

出土土器（第27図）

1は甕で、復元口径20cm、胴部から如意形の口縁部にかけて直線的に立ち上がる。2は壺の底部で底径は9cmを測る。外面は刷毛、内面には指頭痕が残る。

9号土坑（第17図）

楕円形の平面プランを呈しており、その規模は南北約1m22cm、東西約88cm、深さ約15cmを測る。遺物は出土してない。

10号土坑（第17図）

ほぼ円形の平面プランを呈しており、その規模は南北約1m40cm、東西1m30cm、深さ約15cmを測る。遺物は擂鉢が出土しており、中世の時期が考えられる。

出土土器（第28図）

備前焼きの擂鉢で、復元口径31.8cmを測る。口縁は直立しており外面には凹線の沈線が2条巡る。内面には櫛目が残る。

溝（第14・29・33図）

1号溝（第29図）

調査区の中央を直線的に東西に走る。長さは約15mを検出し、幅は東側から広がっており約1m～3mを測る。溝の深さは約50cmで床面は東側から西側へと緩やかに傾斜している。断面は逆台形状を呈する。遺物は須恵器・石器が出土している。

出土土器（第30図）

1は坏の蓋で復元口径12.4cm、器高4cmを測る。2は坏の身で復元口径12.6cm、器高は3.8 cm。3は坏の身で復元口径12.8cm、器高は3.8cmを測る。2・3とも箆削りがみられる。

2号溝（第14図）

1号溝に切られる溝でやや弧状に反りながら南北に走る。検出した長さは約15mで北側は削平により残っていない。幅は約60cm、深さは約20cmと浅い。遺物は甕・壺が出土している。

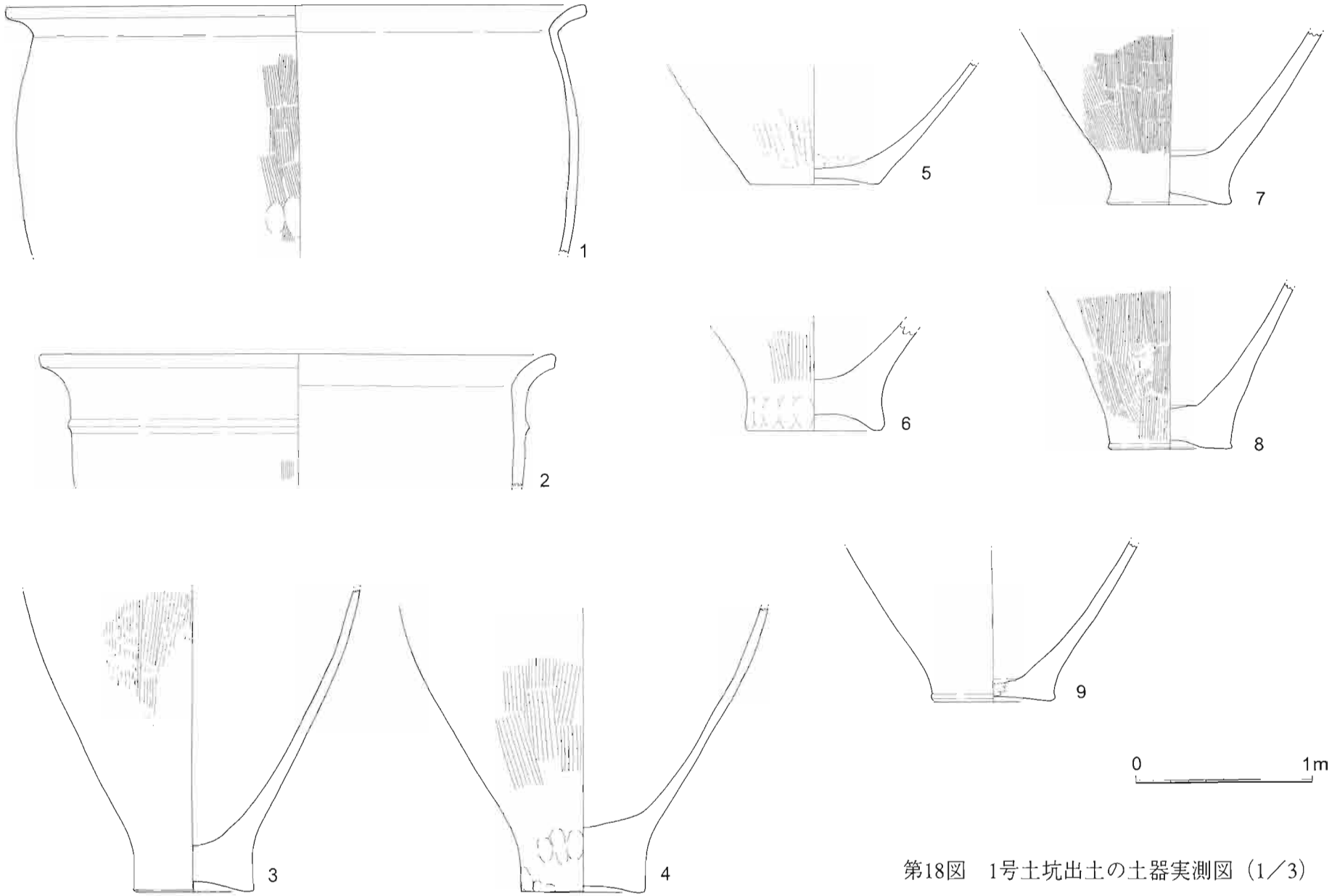
出土土器（第31図）

1は壺で復元口径約23cm、口縁部は逆L字形をなす。2は上げ底の甕で底径11.4cmを測る。

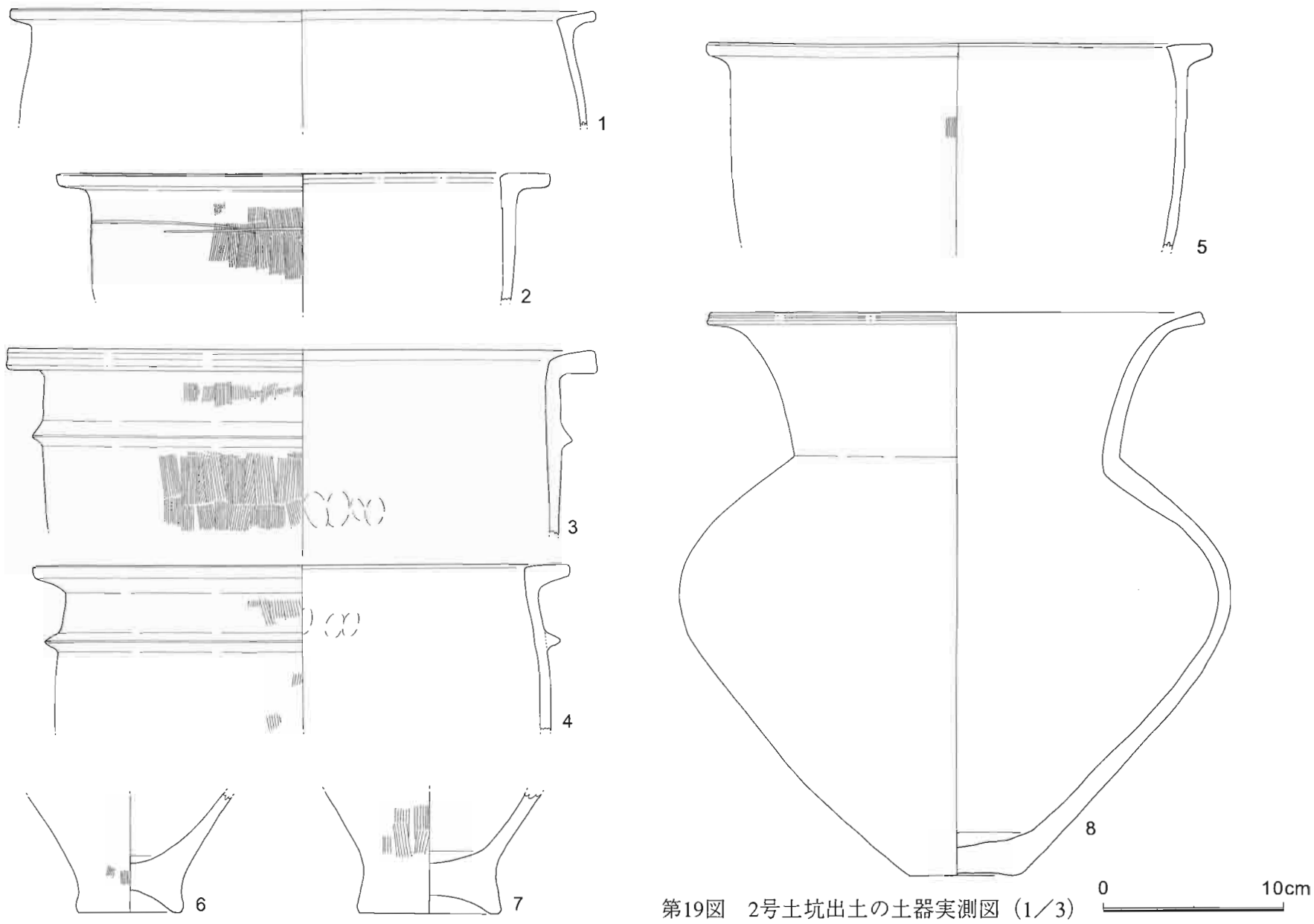
胎土は長石・石英・角閃石・赤色粒を含む。

4号溝（第14図）

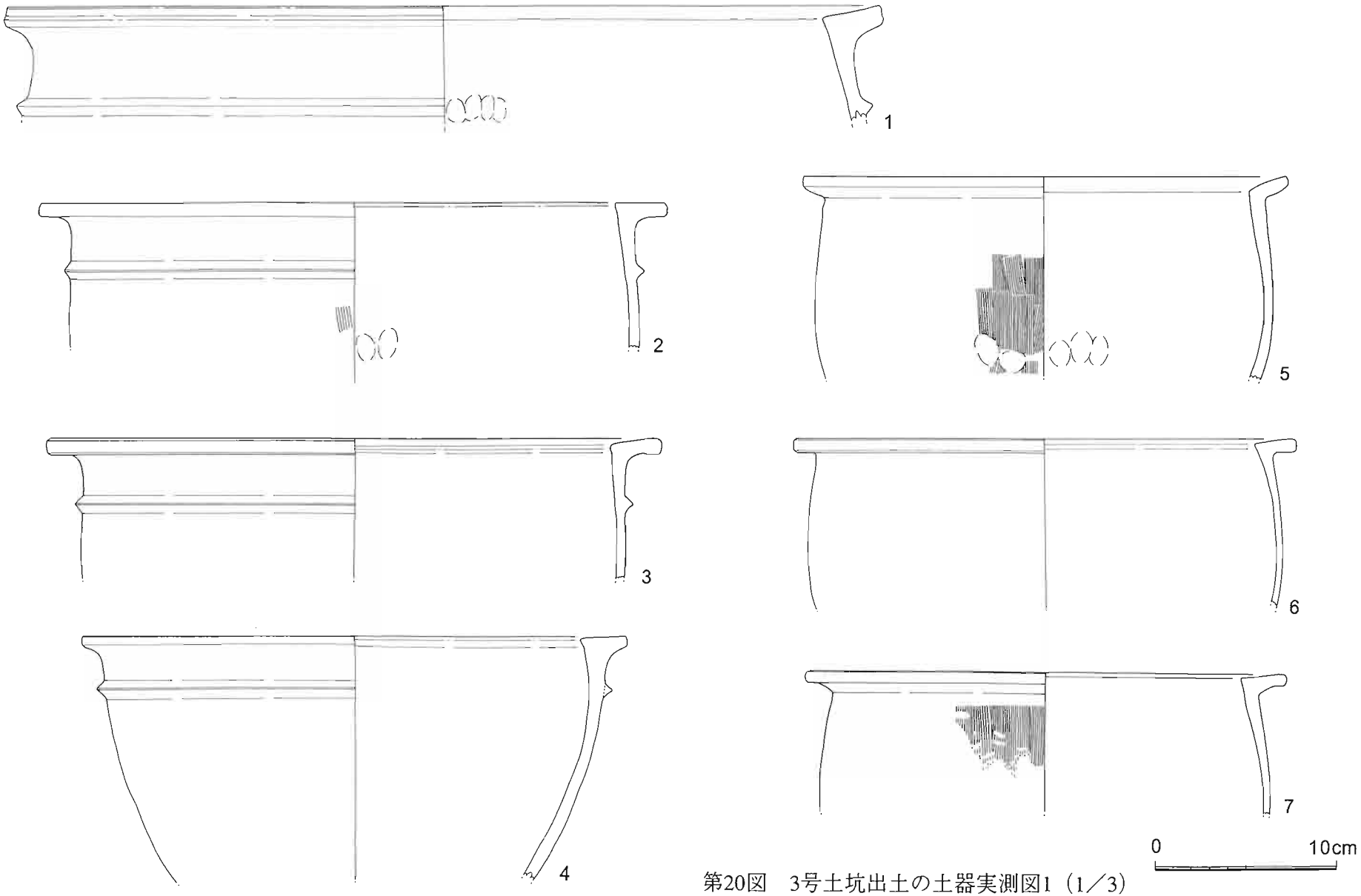
東西方向に直線的に走る溝で、長さ11.5mを検出した。 西側は削平のためか残っておらず、東側



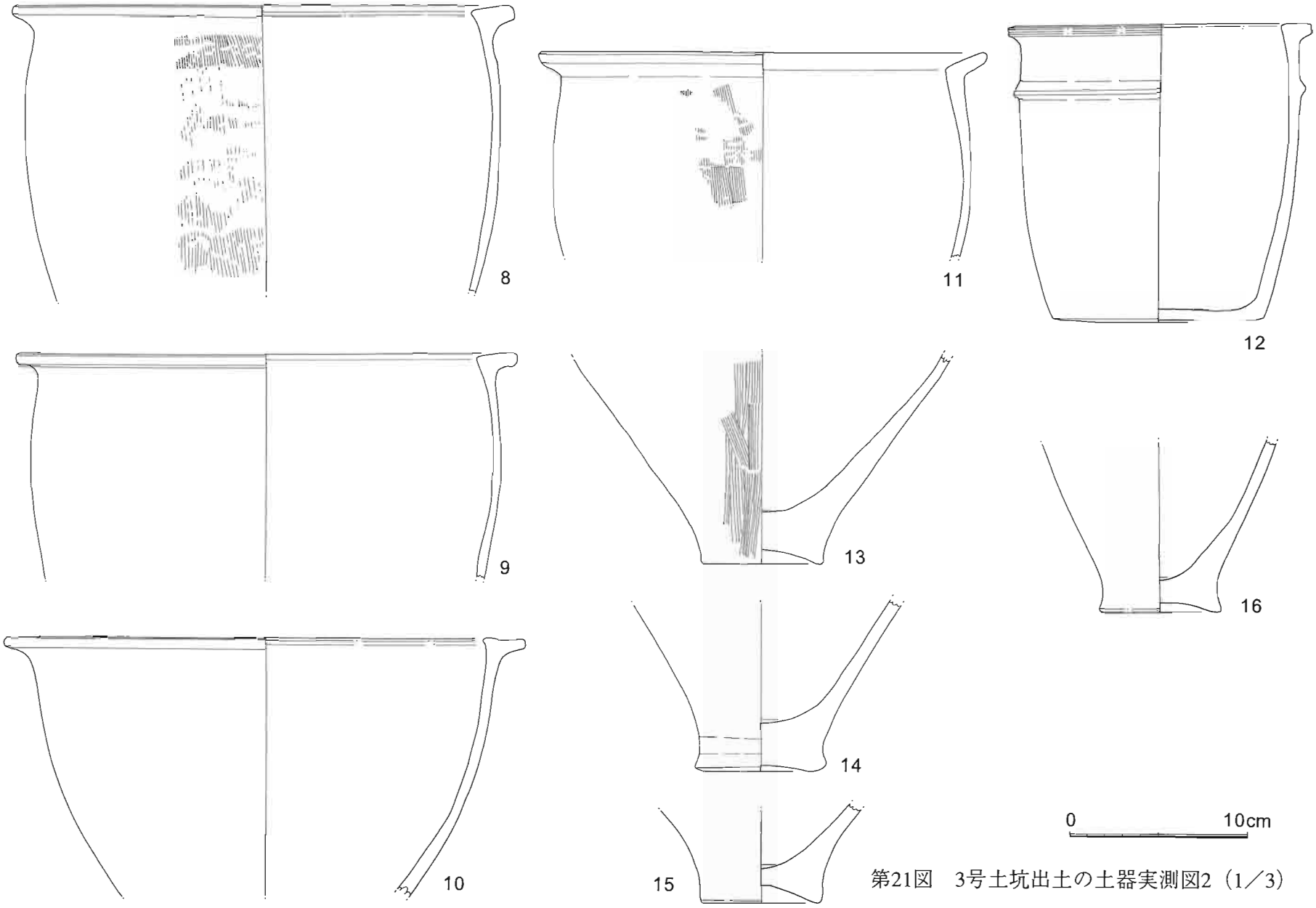
第18図　1号土坑出土の土器実測図（1／3）



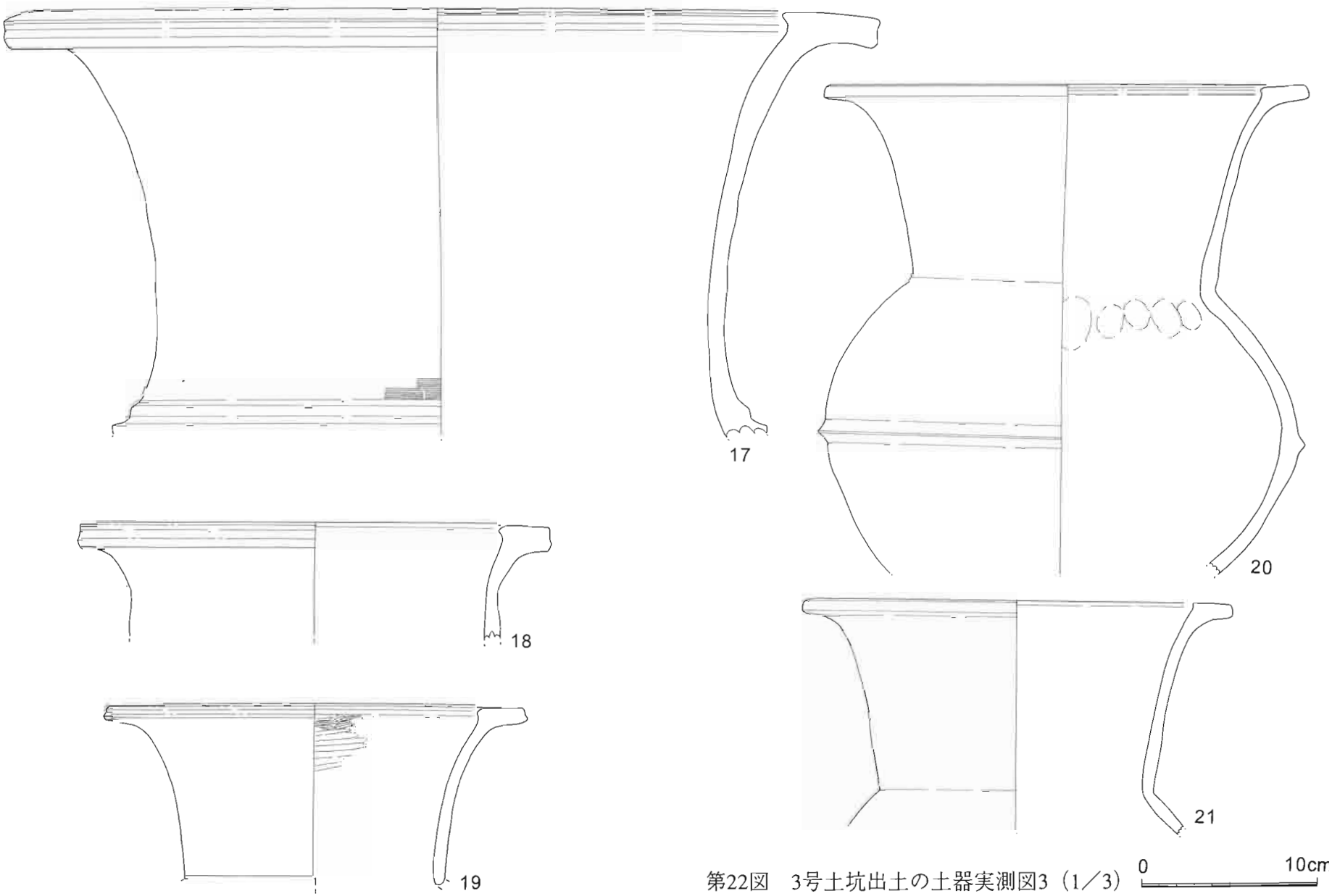
第19図　2号土坑出土の土器実測図（1／3）



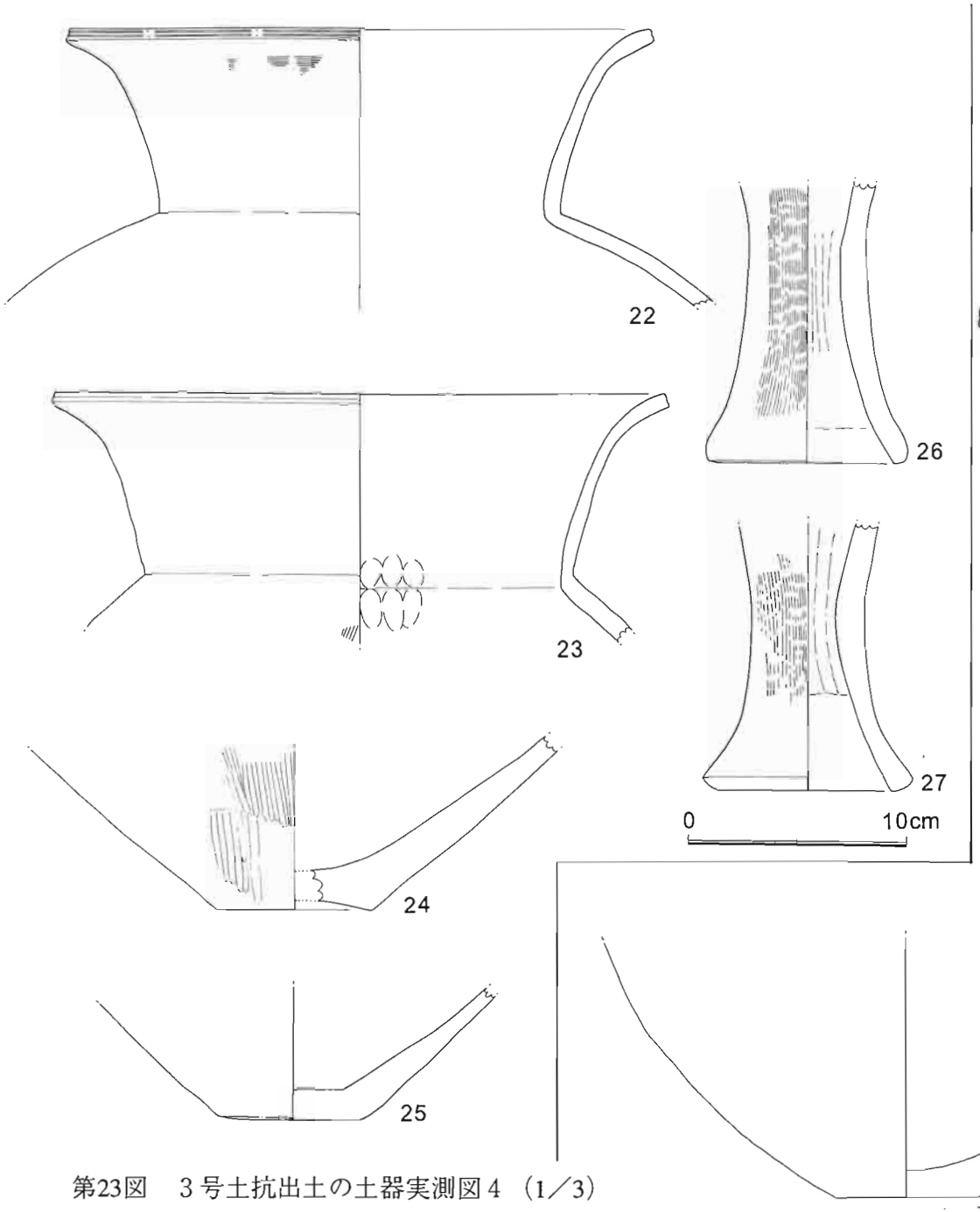
第20図　3号土坑出土の土器実測図1（1／3）



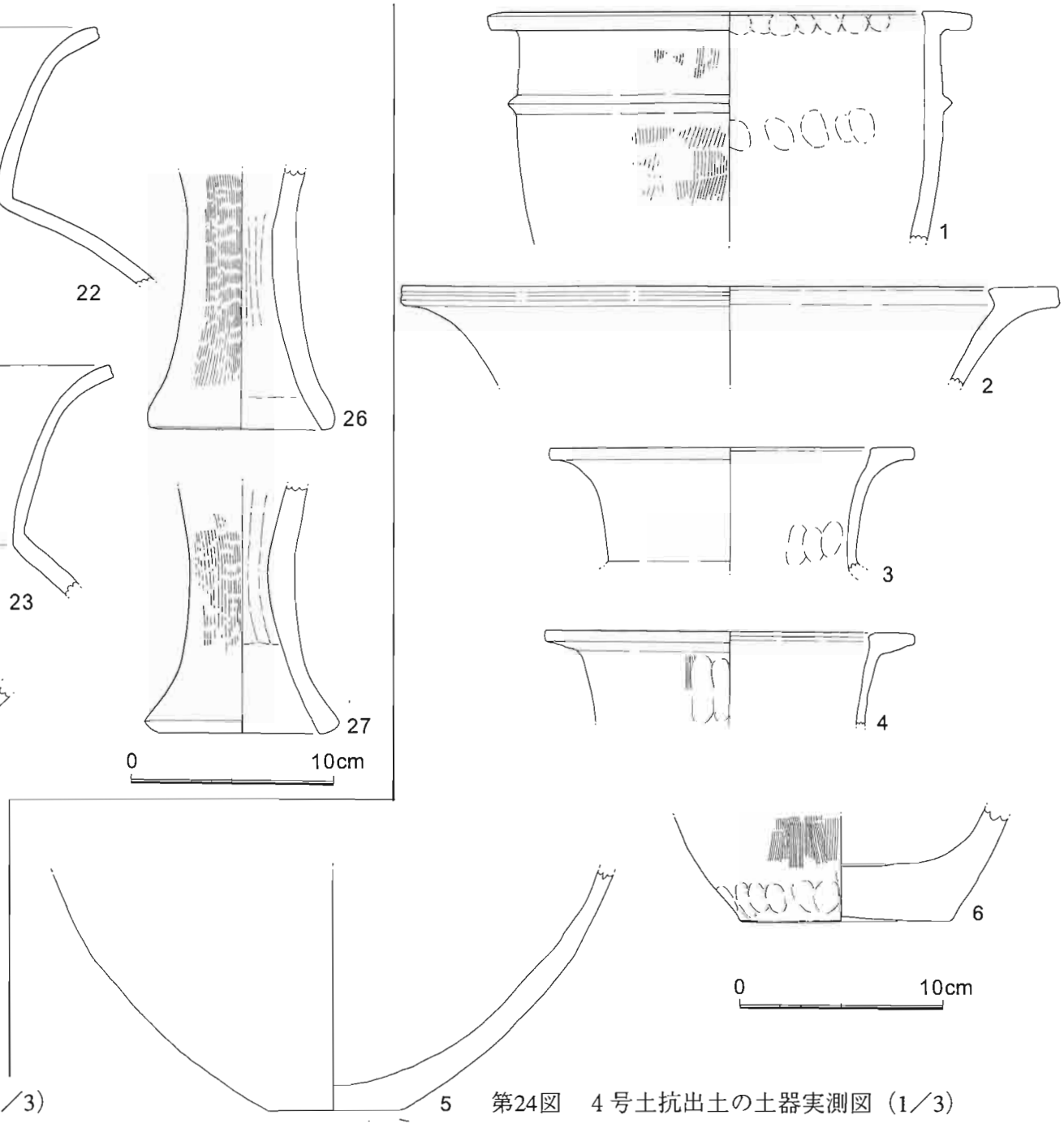
第21図　3号土坑出土の土器実測図2（1／3）



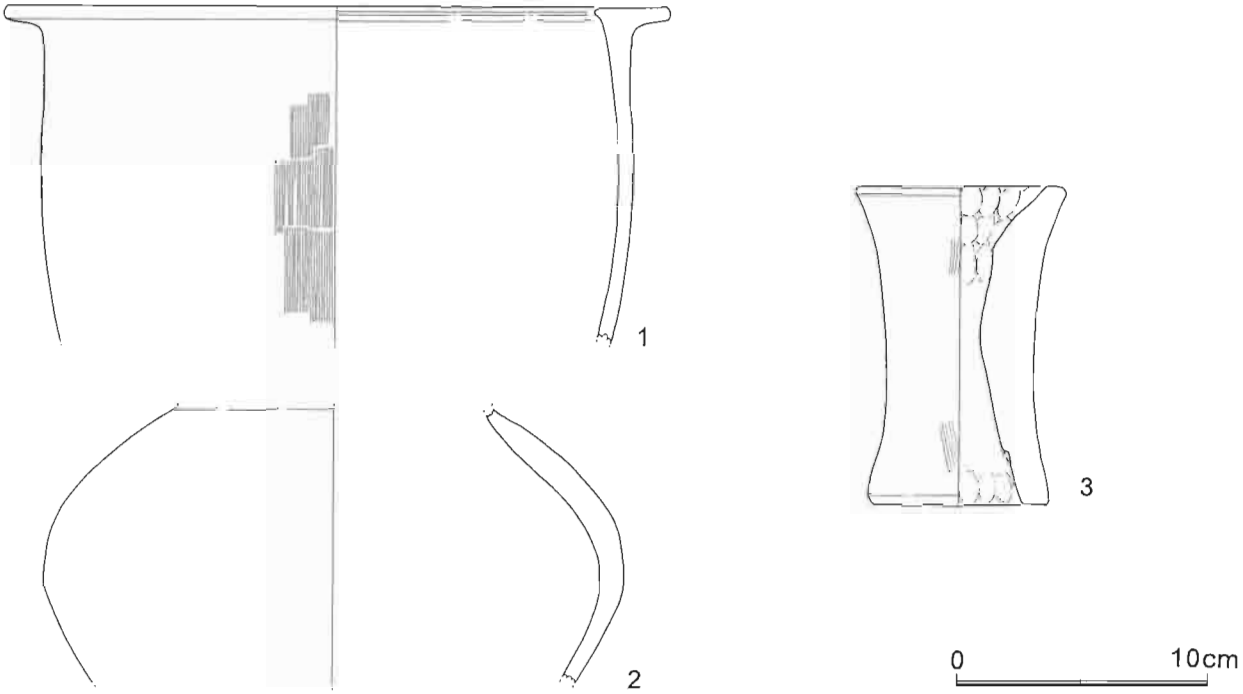
第22図　3号土坑出土の土器実測図3（1／3）



第23図　3号土抗出土の土器実測図4（1／3）



第24図　4号土抗出土の土器実測図（1／3）



第25図　６号土坑出土の土器実測図（１／３）

も一部が攪乱をうける。幅は約40cm、深さは約25cmで東側から西側へと床面は緩やかに傾斜している。遺物は出土していない。

５号溝（第14図）

調査区を南北方向に直線的に走る溝で、約16.5ｍを検出した。幅は約60cm、深さ約20cmで床面は北側から南側へと傾斜している。遺物は壺が出土している。

出土土器（第32図）

複合口縁壺片で、復元口径24cmを測る。外反した口縁にやや丸みをおびた複合部がつく。調整は外面に刷毛、内面接合部に指頭痕が残る。

６号溝（第14図）

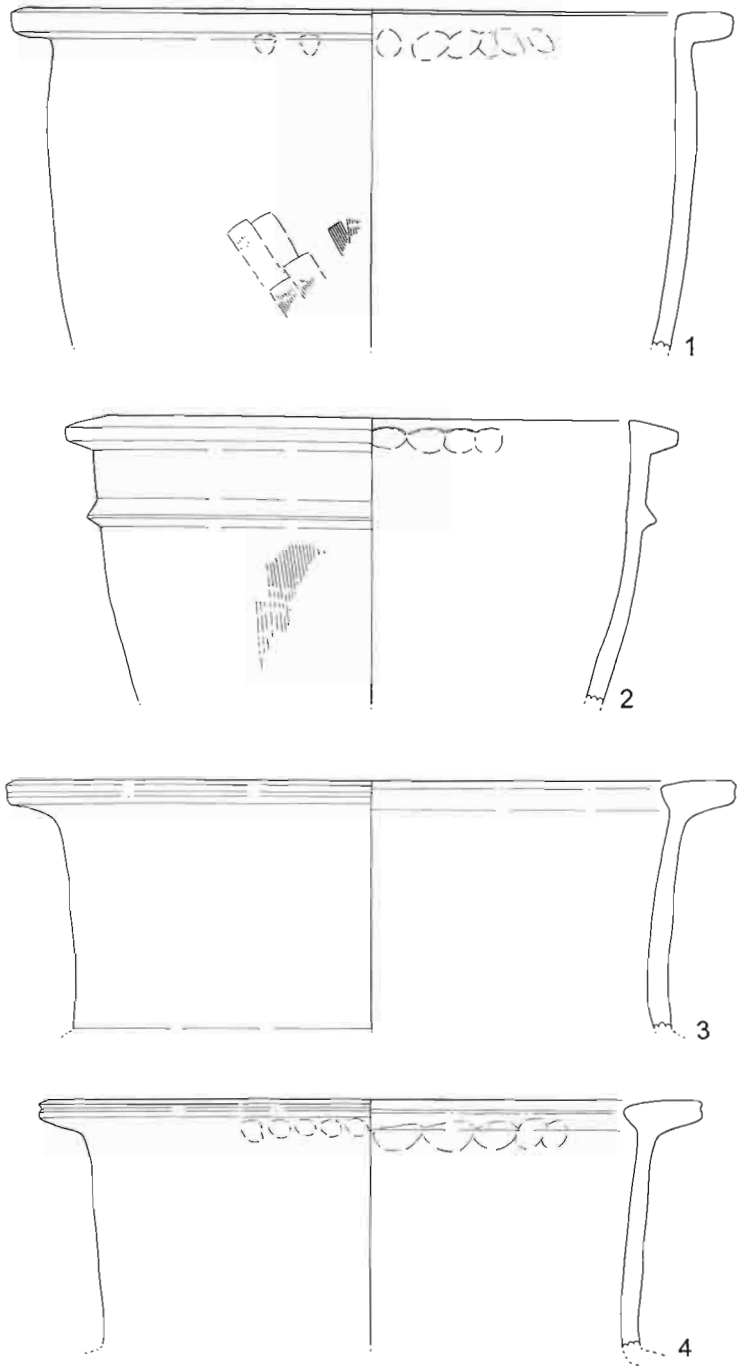
東西方向に弧状に走る溝で、５・８・９号溝を切る。約９ｍを検出し、幅は約45cm、深さは約30cmを測る。溝の床面は東側から西側へと緩やかに傾斜している。遺物は椀が出土している。

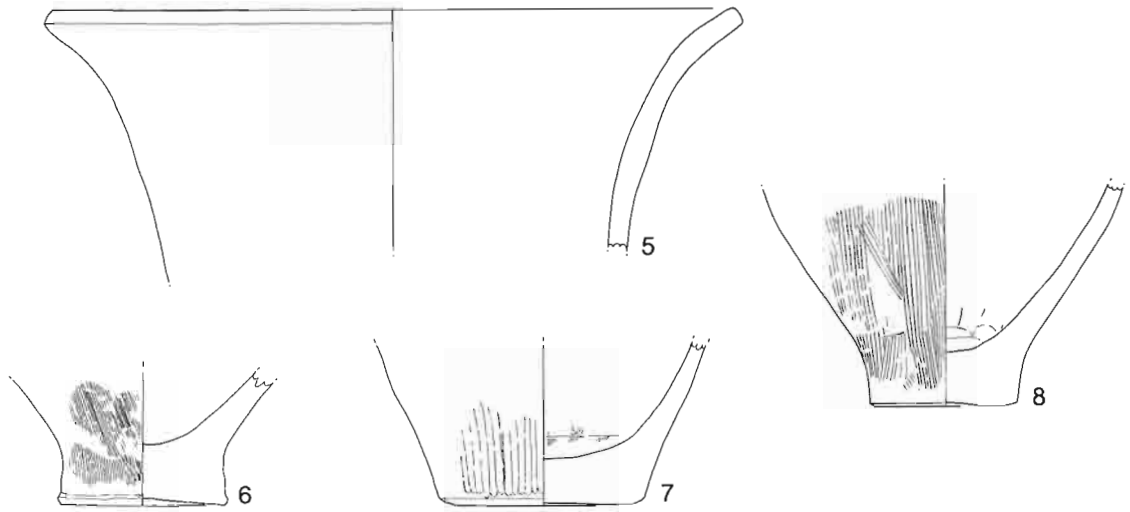
出土土器（第32図）

土師器の椀の口縁片で、復元口径11cmを測る。内外面ともに調整は不明である。

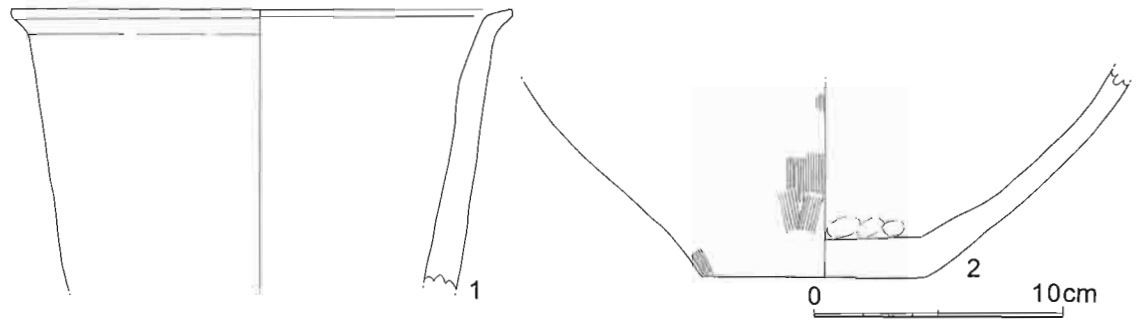
７号溝（第14図）

６号溝と平行して東西方向に弧状に走る溝で長さ約10ｍを検出した。幅は約70cm、深さ約20cmで床面は東側から西側へと緩やかに傾斜している。遺物は出土していない。

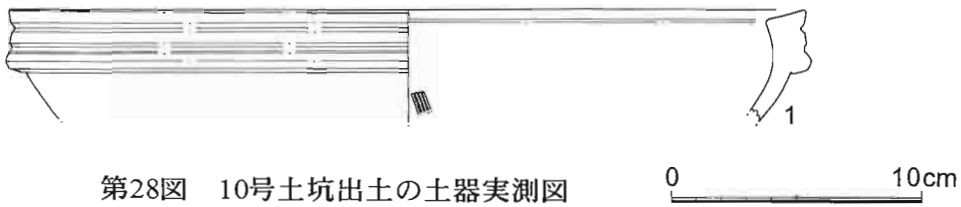




第26図　7号土坑出土の土器実測図



第27図　8号土坑出土の土器実測図



第28図　10号土坑出土の土器実測図

８号溝（第14図）

東西方向に弧状に走る小溝で長さ約３ｍを検出した。幅は約20㎝、深さは約10㎝で、遺物は出土していない。

９号溝（第14図）

８号溝と平行するように東西方向に弧状に走る小溝で長さ約10ｍを検出した。幅は約30㎝、深さは約18㎝を測る。遺物は出土していない。

10号溝（第33図）

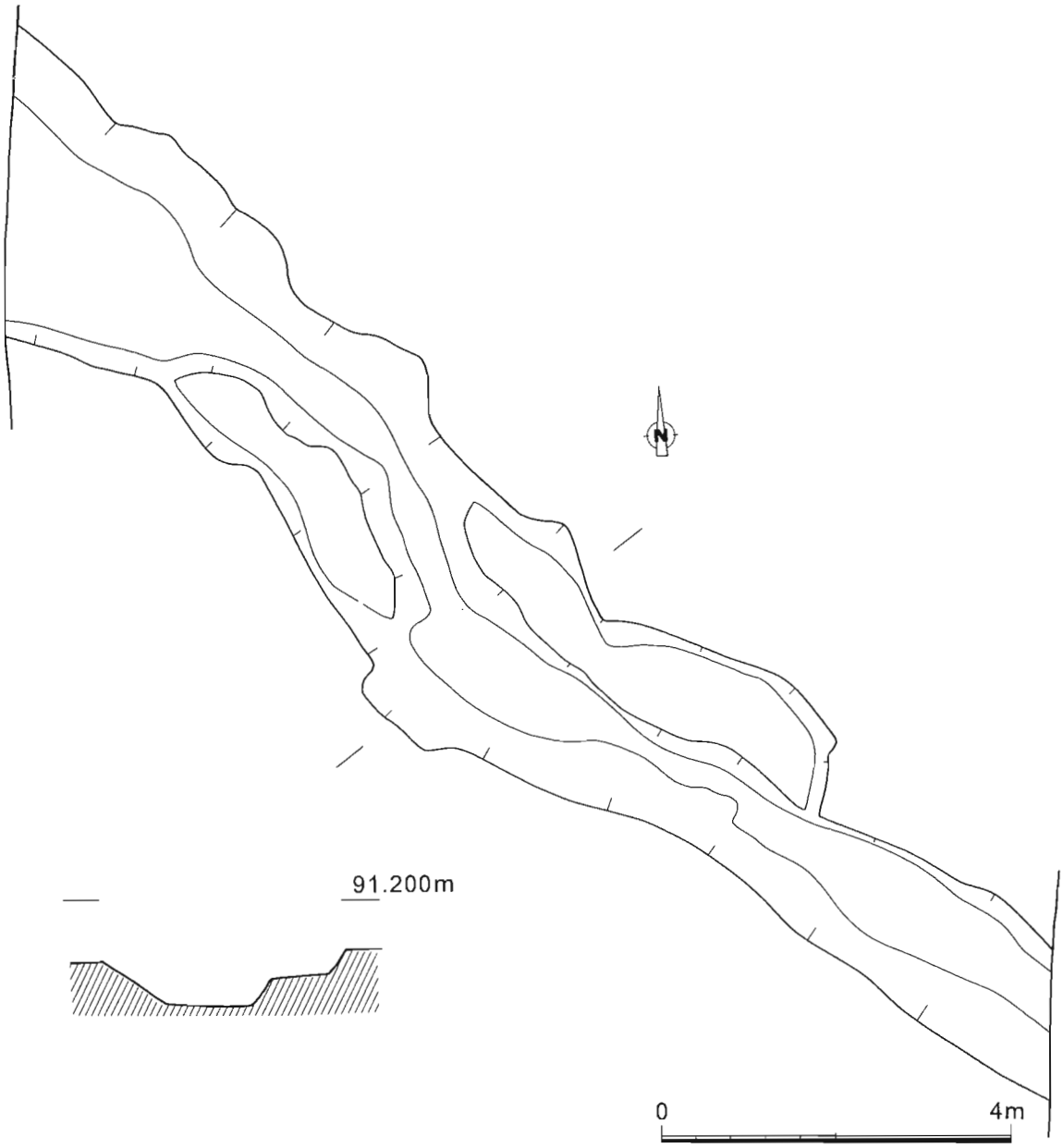
調査区の南側より弧状に走る溝で長さ約７ｍを検出した。５号溝によって切られているが幅は約60㎝、深さは約35㎝でその断面は逆台形を呈している。遺物は、甕・壺・高坏・器台・鉢・石庖丁が出土している。

出土土器（第34～36図）

１～13は甕である。１は完形品で口径25.6㎝、器高30.6㎝、底径6.6 ㎝。逆L字形の口縁に張りの弱い胴部、厚みのある底部がつく。調整は外面に縦方向の刷毛、内面には箆磨きが施される。２は完形品で口径28.3㎝、器高26.8㎝、底径8.6㎝。すぼまる口縁に直線的な胴部、厚みのある底部がつく。外面に刷毛が残る。３は完形品で口径20㎝、器高23.2㎝、底径６㎝。逆L字形の口縁にやや張った胴部、上げ底の底部がつく。４は復元口径25.2㎝。口縁部は逆Ｌ字形をなす。５は復元口径27㎝。「く」字形口縁の端部を跳ね上げており、胴部には刷毛が残る。６は復元口径29.6㎝。７は復元口径30㎝。６・７ともに逆Ｌ字形の口縁下に１条の三角突帯がつく。８は復元口径24.4㎝。９は復元口径24㎝。８・９ともに逆Ｌ字形の口縁下に１条の三角突帯が巡り、胴部には刷毛による調整が残る。10は復元口径25㎝。逆Ｌ字形の口縁下に１条の三角突帯が巡る。胴部内面には箆磨きが残る。11・12・13はともに上げ底で外面に刷毛が残る。11は底径5.4㎝、12は底径6.2㎝、13は底径6.4㎝を測る。14～19は壺である。14は完形品で口径24㎝、器高33㎝、底径７㎝、胴部最大径28㎝を測る。口縁部は逆Ｌ字形をなす。頸部に１条の三角突帯、胴部最大径にM字形突帯がつく。15は復元口径22.4㎝。口縁部は逆Ｌ字形をなし内外面ともに箆磨きによる調整が施される。胎土に金雲母を含む。16は復元口径30㎝。17は復元口径23㎝。16・17ともに口縁部は逆Ｌ字形をなす。18は復元口径18㎝を測る。やや垂下ぎみの逆Ｌ字形口縁をなす。19は底部であるが剥離が激しく調整は不明である。20は高坏の付根部の破片である。21は鉢でやや上げ底の底部をなし口縁にかけて直線的に胴部が伸びる。復元口径12㎝、器高7.2㎝、底径5.4㎝を測る。外面には刷毛による調整が残る。

Ｃ区出土の石器（第37図～38図）

１は石鏃で先端を欠いており、基部には抉りがみられる。残存長2.2㎝、幅1.8㎝、厚さ0.5㎝を測る。２は黒曜石製のスクレイパーで最大長４㎝、最大幅4.4 ㎝、厚さ1.2 ㎝を測る。３～６は２次加工剥片である。３は黒曜石製で最大長3.8 ㎝、最大幅1.9 ㎝、厚さ0.8 ㎝を測る。４は安山岩製で最大長4.5 ㎝、最大幅2.2 ㎝、厚さ１㎝を測る。縦長剥片を素材としており、断面は三角形をなしている。５は黒曜石製で最大長4.05㎝、最大幅1.65㎝、厚さ0.35㎝を測る。縦長の剥片を素材としている。６は最大長3.2㎝、最大幅2.5㎝、厚さ0.6㎝を測る。７・８は使用痕剥片である。

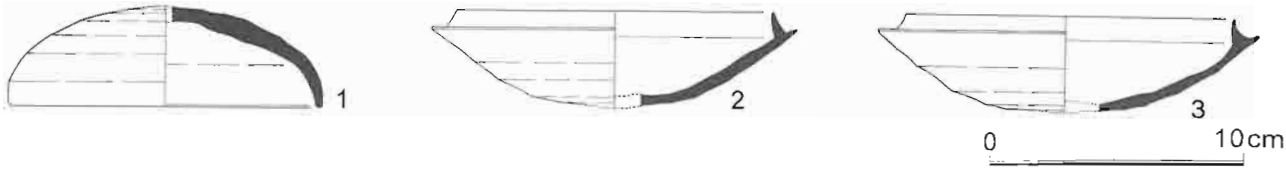


第29図　１号溝の実測図（１／80）

７は最大長3.8 cm、最大幅2.15cm、厚さ0.6 cmを測る。黒曜石製で10号溝出土である。８は最大長3.2 cm、最大幅2.7 cm、厚さ0.55cmを測る。９は打製石斧で、残存の最大長3.2 cm、幅5.8 cm、厚さ0.65cmを測る。10は２号土坑出土の打製石斧で、現存の最大長5.6 cm、幅6.4 cm、厚さ1.2 cmを測る。11は２号土坑出土の打製石斧で、現存の最大長6.2 cm、幅6.1 cm、厚さ1.15cmを測る。12は１号溝で検出した磨製石斧である。最大長13.6cm、最大幅5.5 cm、厚さ3.6 cmを測る。13・14は10号溝で出土した石庖丁で、14は残存の最大長8.5 cm、幅4.85cm、厚さ0.45cmを測る。研磨が顕著にみられる。

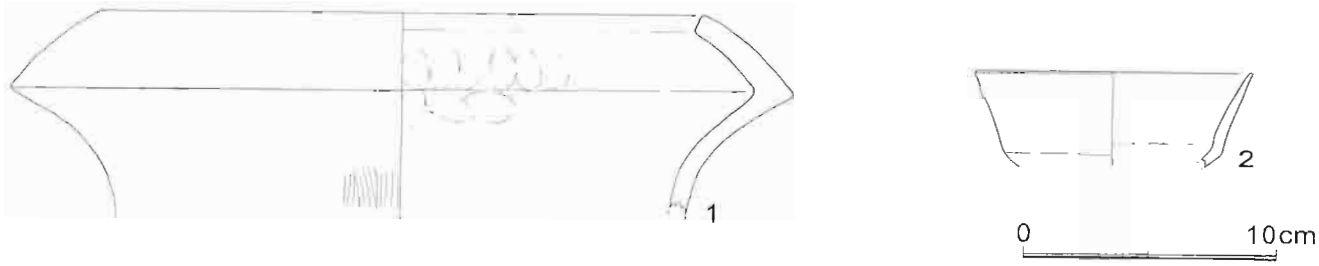
小結

今回、発掘した遺構の時期についてまとめる。



第30図　1号溝出土の土器実測図（1／3）

第31図　2号溝出土の土器実測図（1／3）

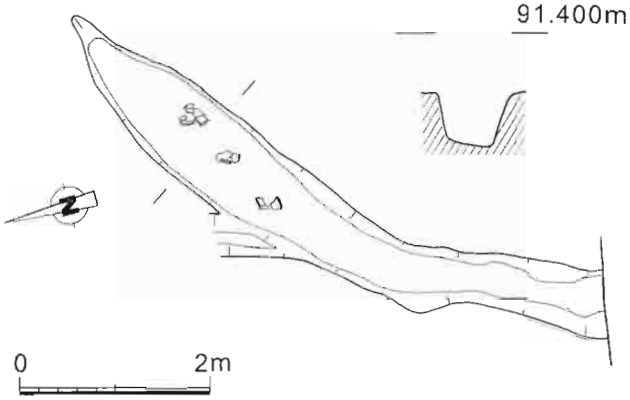


第32図　5・6号溝出土の土器実測図（1／3）

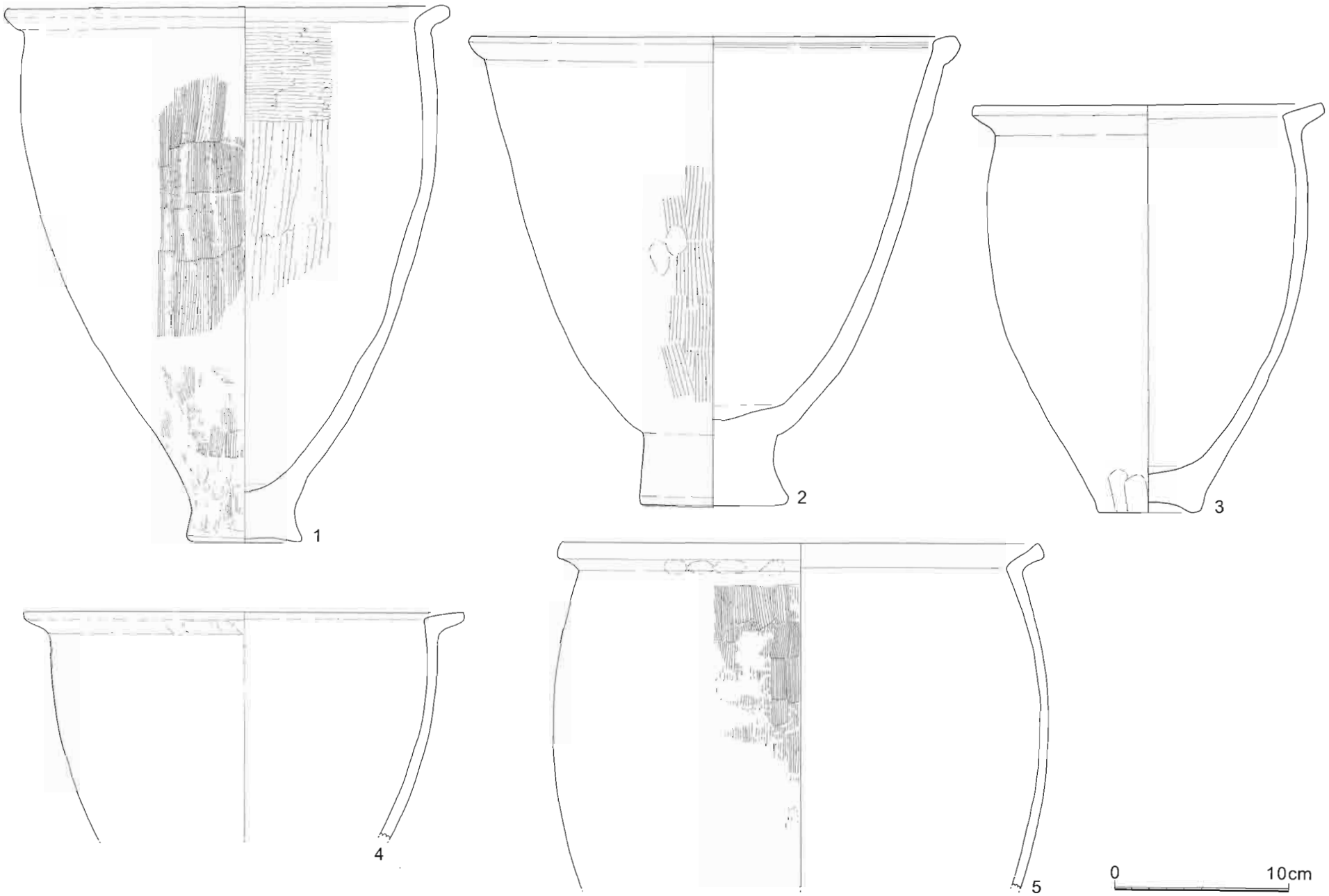
まず、土坑であるが、1～9号土坑は出土した土器の特徴から弥生時代中期前半代、10号土坑は備前焼の擂鉢が出土していることから中世の所産である。

竪穴住居跡については遺物が出土していないが、1～9号土坑と同じ弥生時代中期前半代の範疇と考えられる。

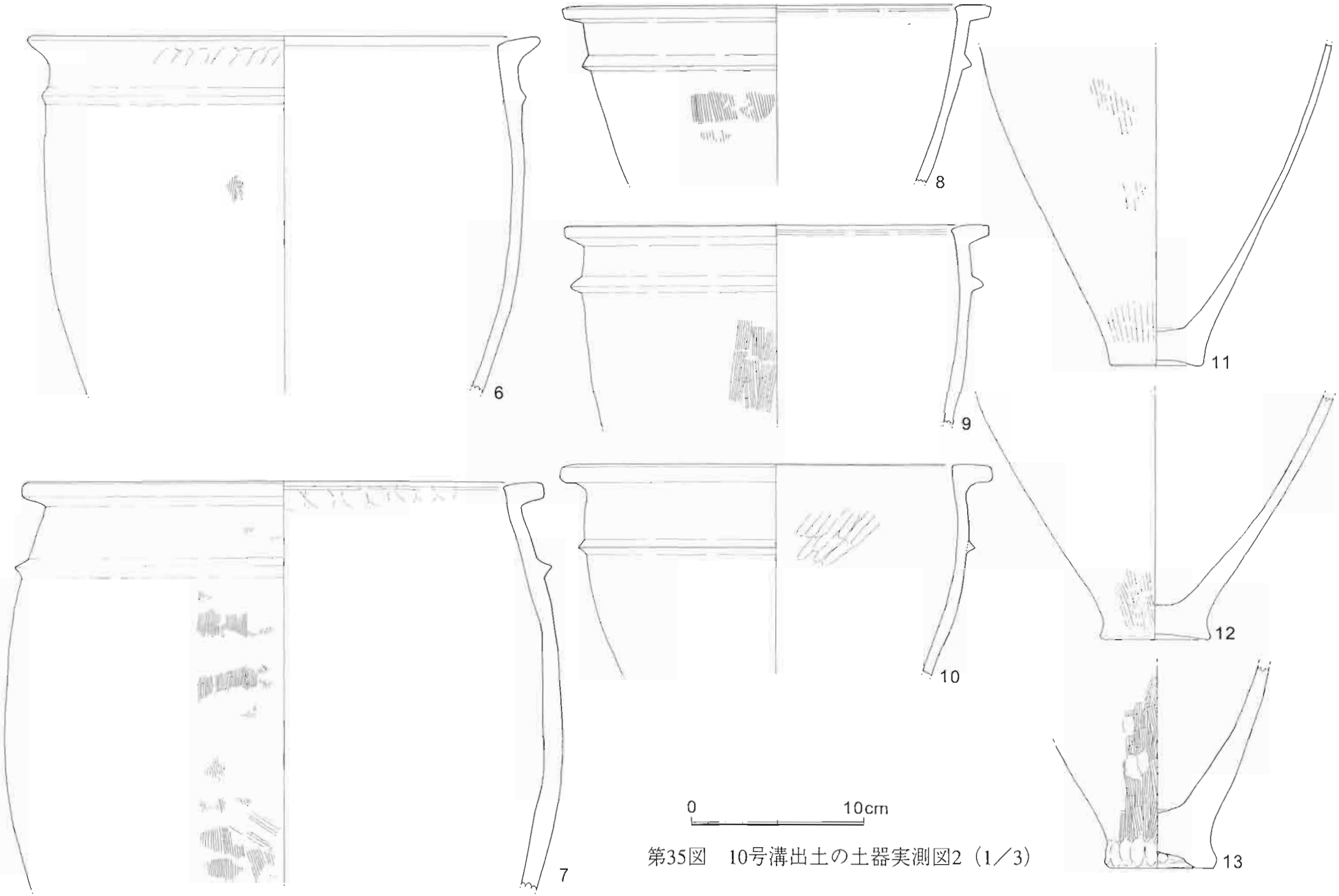
次に溝は、2・10号溝は弥生時代中期前半、5号溝は弥生時代後期後半、1・6号溝は出土した須恵器や土師器の椀より6世紀後半と思われる。8・9号溝については遺物が出土していないため、はっきりとしない。ただし5号溝を切り、6号溝に切られることから弥生時代後期後半～6世紀後半のなかでおさまりそうである。4・7号溝についても時期決定できる土器は出土していないが、1・6号溝と方向を同一とすることから、古墳時代後期の所産と推定される。



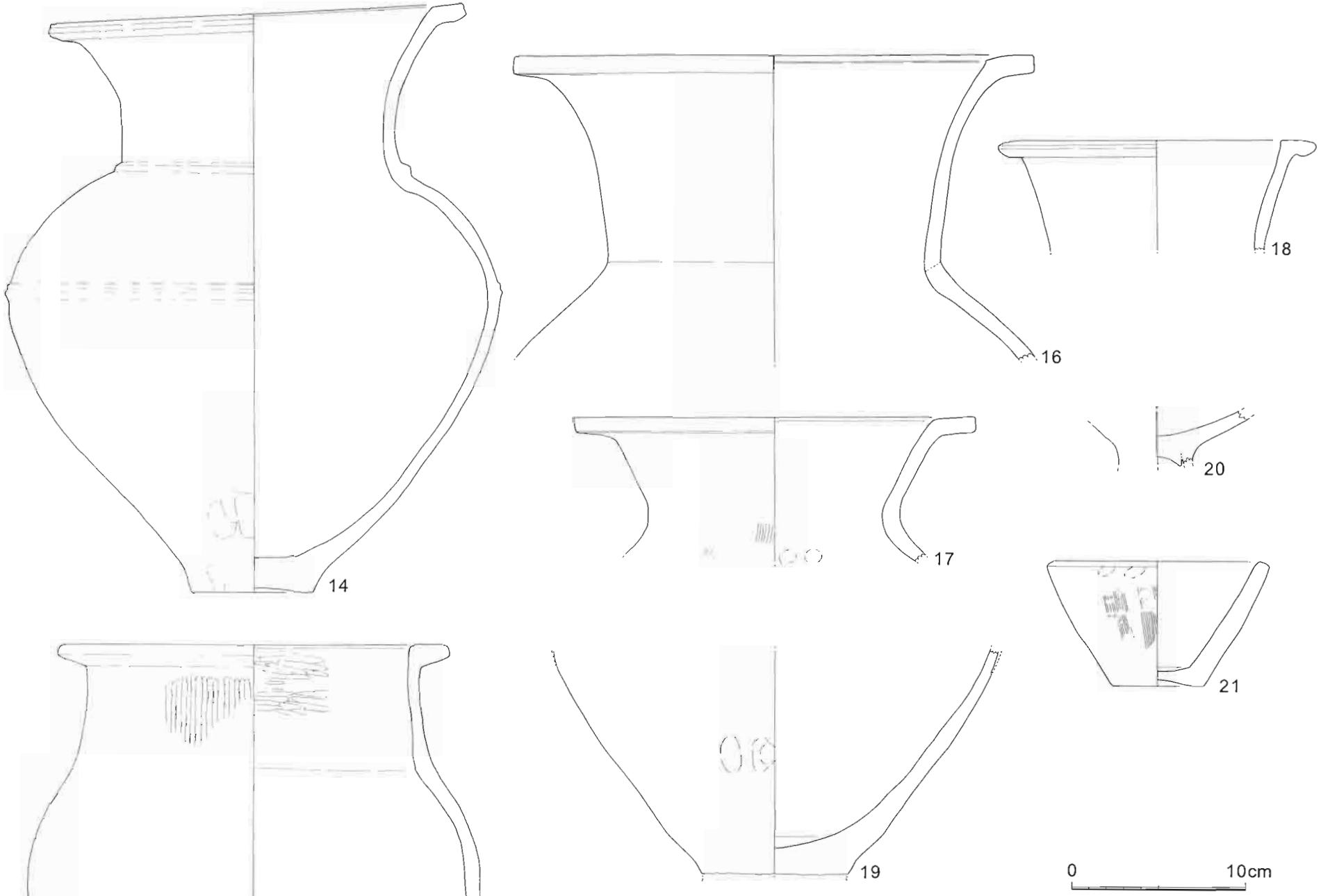
第33図　10号溝の実測図（1／80）



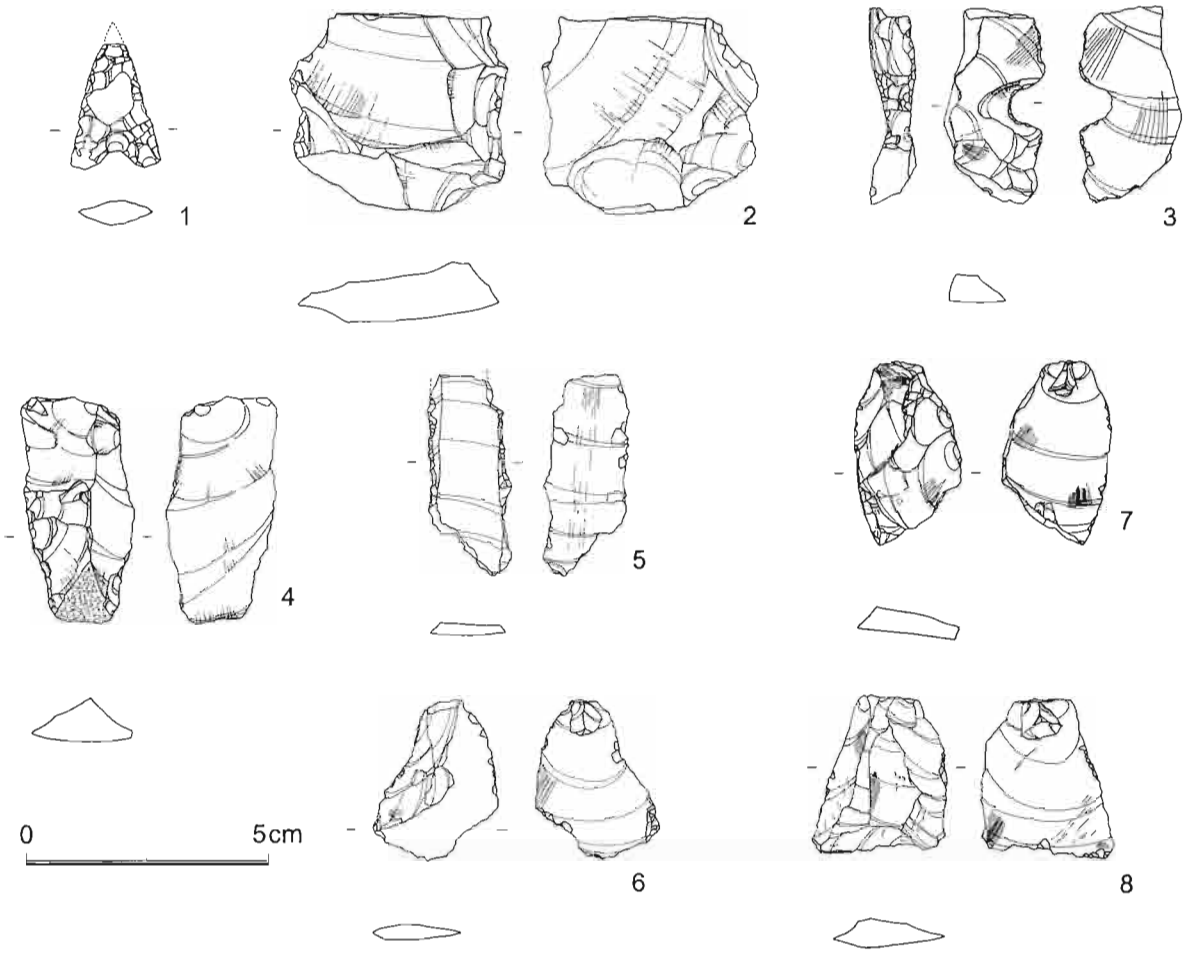
第34図　10号溝出土の土器実測図1（1／3）



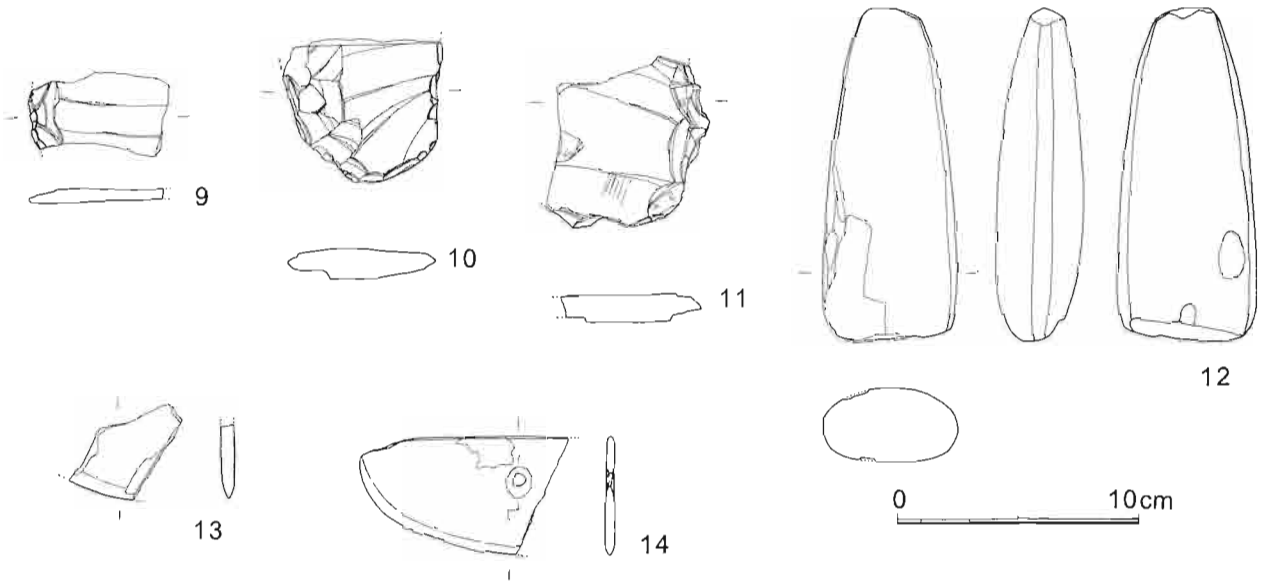
第35図　10号溝出土の土器実測図2（1／3）



第36図　10号溝出土の土器実測図3（1／3）



第37図　Ｃ区出土の石器実測図１（1／3）



第38図　Ｃ区出土の石器実測図２（1／3）

Ⅳ まとめ

会所宮遺跡での３次にわたる調査の成果についてまとめることとする。

Ａ区では古代から中世にかけての溝と柵列が発見された。調査範囲が限られているためその性格ははっきりしないが、会所山丘陵と深い関連が考えられる。

Ｂ区では刻目突帯文土器が注目される。１点しか出土していないが、日田盆地では初例となる。この時期の土器の様相が不明瞭であっただけに、貴重な発見である。

Ｃ区では弥生時代の竪穴住居や土坑、溝で構成される集落跡が発見された。これらのうち、土坑や溝からは甕や壺を主体とし、器台や高坏、鉢などが共伴する土器群が出土している。こうした土器群は竪穴住居の上面が大きく削平を受け、柱穴しか残っていなかったことを考慮すると、土坑や溝も本来はさらに深かったと想定され、一括廃棄されたものととらえられる。

こうした遺構から出土した土器をみてみると、まず１号土坑からは中期初頭に比定される城ノ越式の特徴を持つ如意形に外反する口縁部に、厚い上げ底の底部を有する甕が出土している。他の遺構については、須玖式の特徴を持つ逆Ｌ字形の口縁を呈する甕が出土しているが、平坦面は短く、先端部が内側から外側に向けてやや上向に延びるなど古い形態を残していることから、須玖Ⅰ式の範疇でおさまるもので中期前葉から中葉に比定される。

よって、土坑や溝は城ノ越式から須玖Ⅰ式にあたる中期前半代の範疇でおさまりそうである。竪穴住居についても円形プランであることから、土坑や溝とほぼ同時期の遺構と考えられる。

さらに、こうした土器資料の中には胎土に雲母を含んだ搬入品と考えられるものもあり、今後他の遺跡と詳細な検討が必要となろう。

Ｃ区の弥生中期前半代の集落は遺構の密度こそさほどではないが、調査区全面に広がりをもっている。南側のＢ区の調査で弥生期の集落跡が確認されていないことを考えると、南側へと広がることはなさそうである。むしろ山裾を中心に北側へと広がりをみせるものと推定される。

これまで市内での中期前半代の集落については、日田盆地周辺の台地上を中心に確認されてきている。今回のように沖積地に営まれた集落は､徳瀬遺跡についで２例目の発見となる。この時期、盆地内の沖積地に立地する遺跡例が希少だっただけに、今後はこうした台地下での調査によっては事例が増えるものと考えられる。

また、弥生時代後期から古墳時代後期の溝は、幅が細いにもかかわらず深く掘方もしっかりしており、水路として機能していた可能性が高い。沖積地一帯における水田開発の進捗を考える上で重要であるが、調査範囲が限られており、水田遺構等も検出できなかったことから今後の調査に期待される。

付　鳥羽塚古墳について

現在日田市内には消滅したものを含めて58基の古墳の存在が確認されている[1]。本書で調査報告を行った会所宮遺跡A区の南側に位置する会所山にも、3基の古墳の存在が知られている。鳥羽塚古墳、後山古墳[2]、会所宮古墳[3]である。

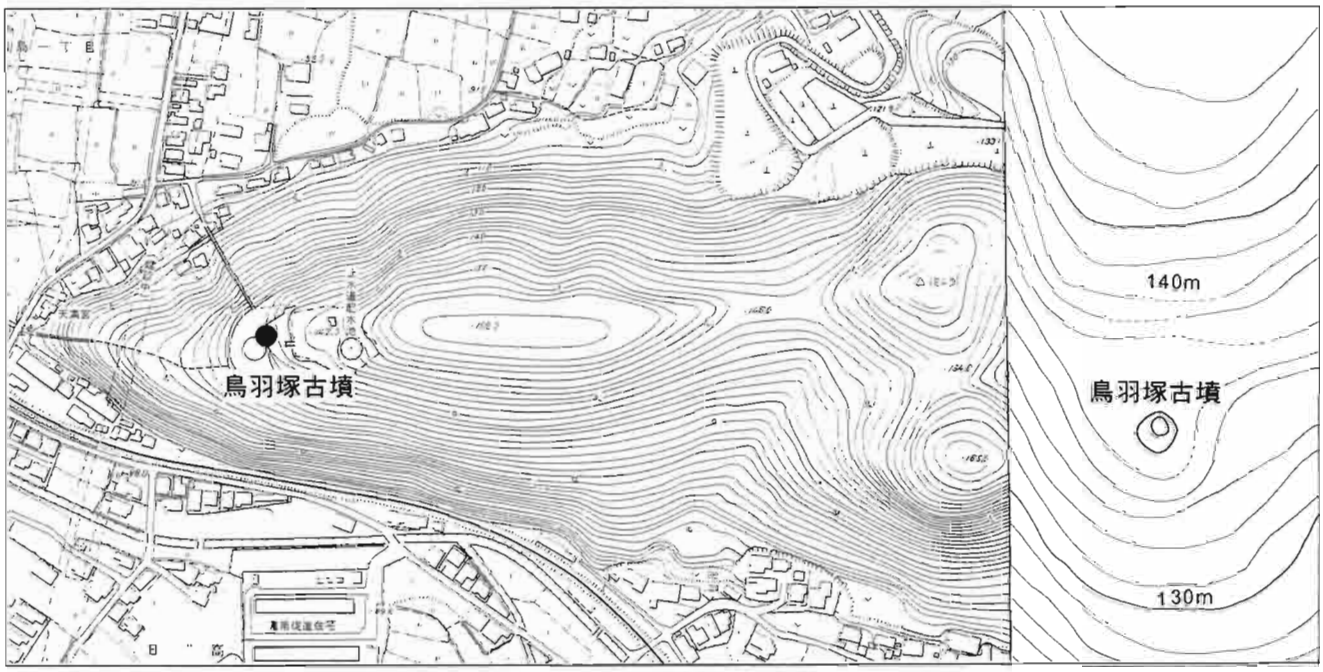
このうち、鳥羽塚古墳は市内でも古くから知られていた古墳の一つで、明治4年に会所宮を記した上地絵図には“止波塚”として古墳の様子が描かれている。その後、會所宮に古墳1基が存在することが報告され[4]、昭和47年の県教委の調査[5]以後、“鳥羽塚古墳”として周知されるに至っている。この間、それまで未整備であった日田市の水道事業が本格的に進められるようになり、会所山に上水道配水池が計画された。昭和29年にはその擁壁工事に伴い古墳の大部分が破壊されてしまった。その工事の際に古墳から出土したされる土器が現存している。市内在住の横尾久喜氏が採集した資料で、ここに遺物の紹介を中心に鳥羽塚古墳についてまとめることとする。なお、資料は平成元年12月に横尾氏が日田市立博物館に寄贈され、市埋文センターにて保管されている。

1）古墳の位置と現状（第39図）

鳥羽塚古墳は日田市大字日高73番地に所在する。古墳のある会所山は日田盆地の東側にあたり盆地に向かって突き出た独特の形をしている。丘陵は東西が約75m、南北が約30mと東西方向に細長く、丘陵上には3つの頂部がみられる。標高は約160 m、沖積地との比高差は約60mを測る。この会所山については、古代の比多國造鳥羽宿禰[6]が民庶と会する所としての記録[7]も残っている。

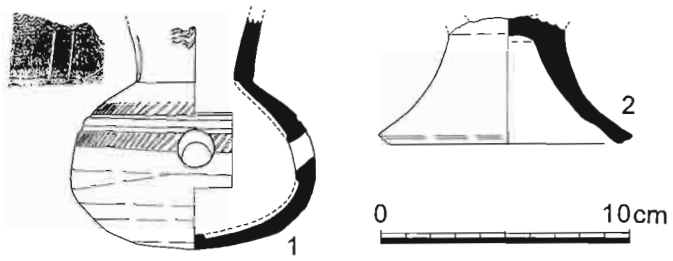
古墳は第39図左に黒点で示した丘陵中腹の標高約135 mに立地する。そこは丘陵地形からしても、盆地内が一望することができる好所でもある。現在古墳の上（東側）と下（西側）には上水道タンク2つが設置されていて、下（西側）のタンクのすぐ背後に墳丘が残る。しかし、どこまでが墳丘ラインなのか、把握することは困難な状況にある。タンク周辺はきれいに整備されているが、古墳の位置を示すかのように、墳丘と思われる場所には樹木が植えられている。

古墳の形態については、これまで円墳とされてきた[8]。 市水道課に残る昭和29年の工事図面から等



第39図　鳥羽塚古墳の位置（1/5000）と昭和29年の測量図（1/100）

高線を抜き出したものが、第39図（右）である。はっきりとその存在が記されている。古墳を対象とした正確な測量図でないため信用性は薄いが、図をみるからには径10mほどの円墳であったことが読み取れる。しかも、古墳の位置する場所に限って等高線が乱れていることから、古墳の築造にあたっては地山整地が行われたと考えることができそうである。



第40図　鳥羽塚古墳出土の土器実測図（1/3）

2）古墳採集の遺物（第40図）

古墳から出土採集された２点の土器はいずれも須恵器で、完形品はなく一部を欠する。

１は瑳である。口縁部を欠く。頸部は肩部から外半するように広がり、肩部に近い位置に波状文と「II」のヘラ記号が施されている。頸部と胴部の境は明瞭で、胴部はやや肩の張った扁球形をなす。胴部上位に２本の沈線が巡り、ほぼ中央には穿孔がみられる。最大径は胴部下位にあり、底部は半球形をなす。内面は回転ナデ。外面は上位が回転ナデ後に櫛描列点文、下半は回転ヘラ削り。色調は灰色、胎土は石英・微細粒を含む。焼成は良好。胴部の高さ6.7 cm、最大径は9.8 cmである。２は高坏の脚部であろう。脚部は短く、ラッパ状に開く。丸みのある端部は外方にのび、面となる。調整は内外面ともナデによる仕上げ。色調は灰色、胎土は石英・微細粒を含む。焼成は良好である。脚部の高さ4.4 cm、径10.2cmを測る。

3）まとめ

これまで会所宮山丘陵では風倒木処理や林道開設のたびごとに弥生土器などが採集されてきた[9]が、その中には須恵器は見当たらない。このことから２点の須恵器は古墳に伴う遺物と考えて間違いなさそうである。その年代については瑳の頸部が細く、高坏と考えられる脚部の形状の特徴から小田編年の3－ｂ期[10]に当たる。ただし、今回の資料が古墳の築造年代を示すものかどうかは、追葬の有無の可能性をも含めて即断することはとうてい不可能なことであるから、古墳の年代については概ね６世紀後半頃と考えたい。

また、古墳の形状や規模については現状でははっきりしないが、昭和29年の測量図を参考とするならば、少なくとも径10mほどの円墳であった可能性が高いことを指摘しておく。築造年代と同様に古墳の詳細については、わずかに残る墳丘や周辺の今後の調査に期待したい。

註）１．大分県教育委員会　『大分県遺跡地図』　1993年
２．古墳は昭和58年に市教委が墓地造成に伴い発掘調査を行い、６世紀後半頃の円墳と考えられている。調査担当者の高橋徹（大分県教育委員会）氏よりご教示いただいた。
３．羨道部が露出しており、横穴石室墳と推定される。
４．日名子太郎　「日田郡古墳横穴所在地調査一覧表」　1925年
５．大分県教育委員会　『日田市・玖珠町埋蔵文化財分布一覧』　1973年
６．『國造本紀』には、止波足尼とある。
７．渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成８下　豊後国史料』（1995年）に所収。
８．５と同じ。
９．石丸邦夫氏が採集された資料を実見させていただいた。
10．北九州市埋蔵文化財調査会　『天観寺山窯跡群』　1977年

写　真　図　版

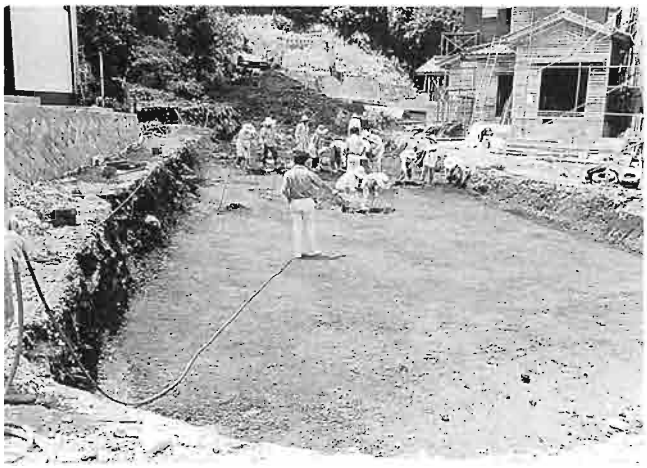
A区の空中写真（真上より）

1号溝と1号柵列の空中写真（真上より）

1号溝の発掘状況
（東より）

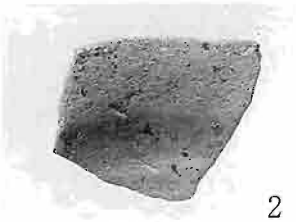
図版2

2号溝の発掘状況（東より）



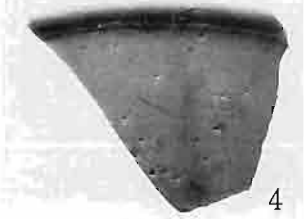
調査風景（北から）

1



2

3



4

5

6

1～6
1号溝の出土遺物

B区の全景（南より）

1・2号土抗の発掘状況（東より）

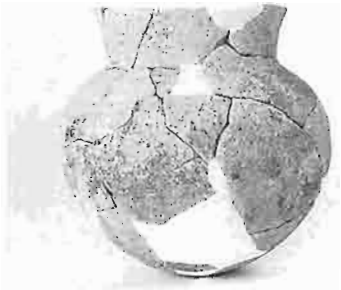
3号土抗の発掘状況（南より）

4号土抗の発掘状況（南より）

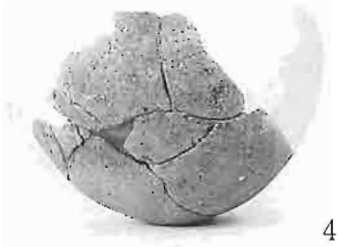
図版4

5号土抗の発掘状況（南より）

1号溝の発掘状況（西より）



1



4

6

8

9

14

16

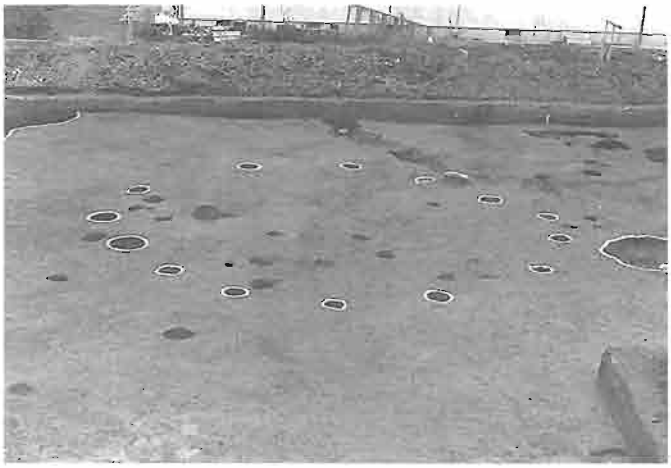
17

18

1、4、6	1号溝状遺構
8	4号溝状遺構
9、10	包含層
16	6号土抗
17	3号溝状遺構
18	4号溝状遺構

C区の調査風景（南より）

C区の全景（南より）



1号竪穴住居の発掘状況（東より）

1号土坑の発掘状況（南より）

図版6

2号土坑の発掘状況（東より）

3号土坑の発掘状況（西より）

3号土坑の発掘状況（南より）

3号土坑の発掘状況（南より）

4号土坑の発掘状況（東より）

5号土坑の発掘状況（南より）

6号土坑の発掘状況（西より）

7号土坑の発掘状況（西より）

図版8

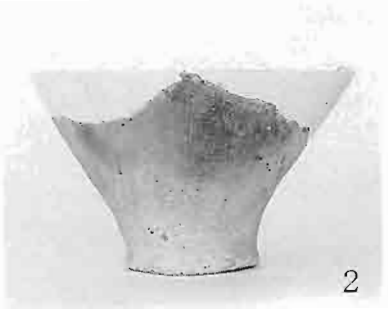
8号土坑の発掘状況（東より）

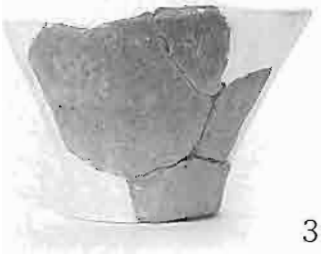
1・2号溝の発掘状況（北より）

5・10号溝の発掘状況（南より）

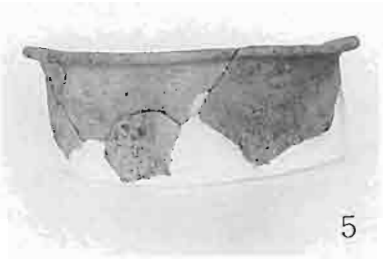
調査風景（南より）

1

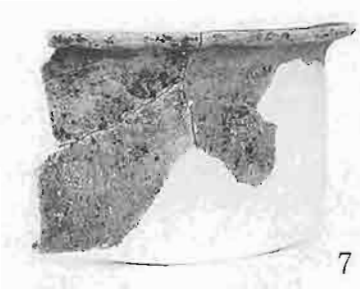

2

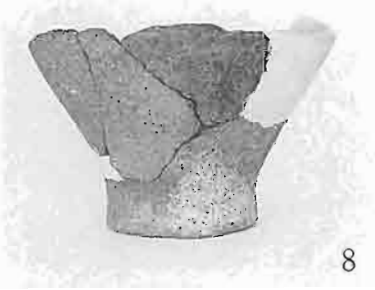

3

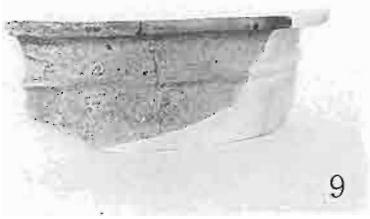
4


5

6


7


8


9

10

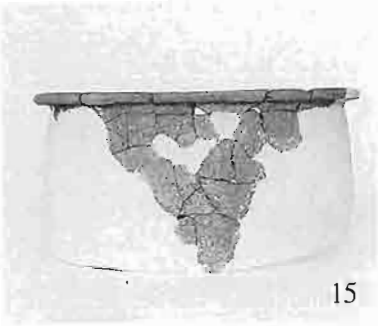
11

1～3　1号土坑の出土土器
4～8　2号土坑の出土土器
9～11　3号土坑の出土土器

13

12

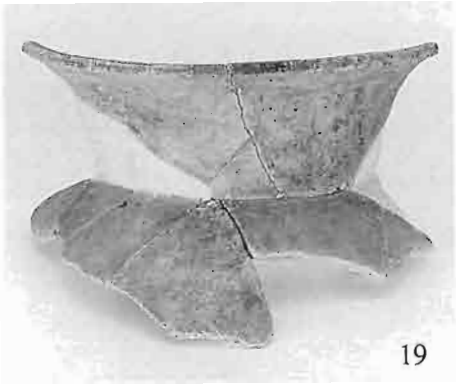
14


15

17

16

18


19

12～19　3号土坑の出土土器

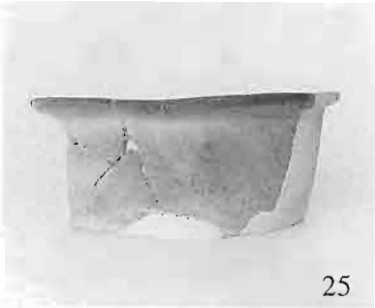
20

21

22

23

24


25

26

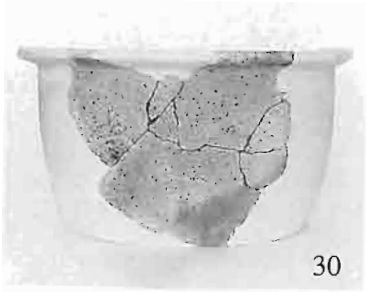
27

28

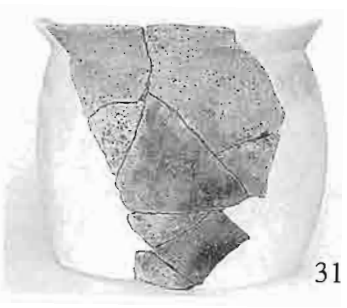
20	3号土坑の出土土器
21～23	6号土坑の出土土器
24～26	7号土坑の出土土器
27	8号土坑の出土土器
28	1号溝の出土土器

図版12

29



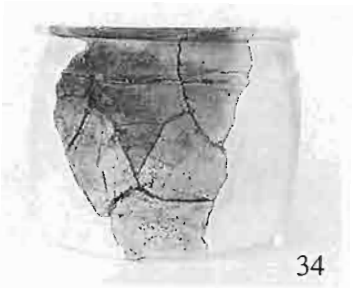
30



31

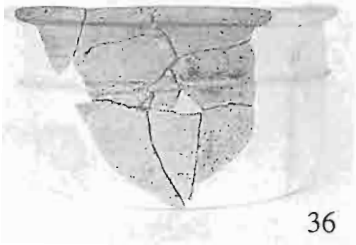
32

33



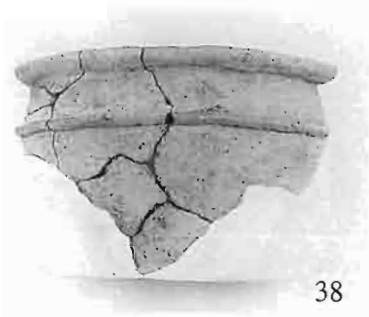
34

35



36

37



38

39

29　　1号溝の出土土器
30～39　10号溝の出土土器

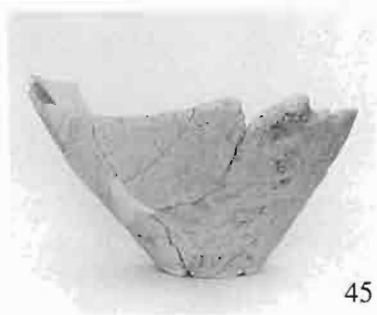
40

41

42

43

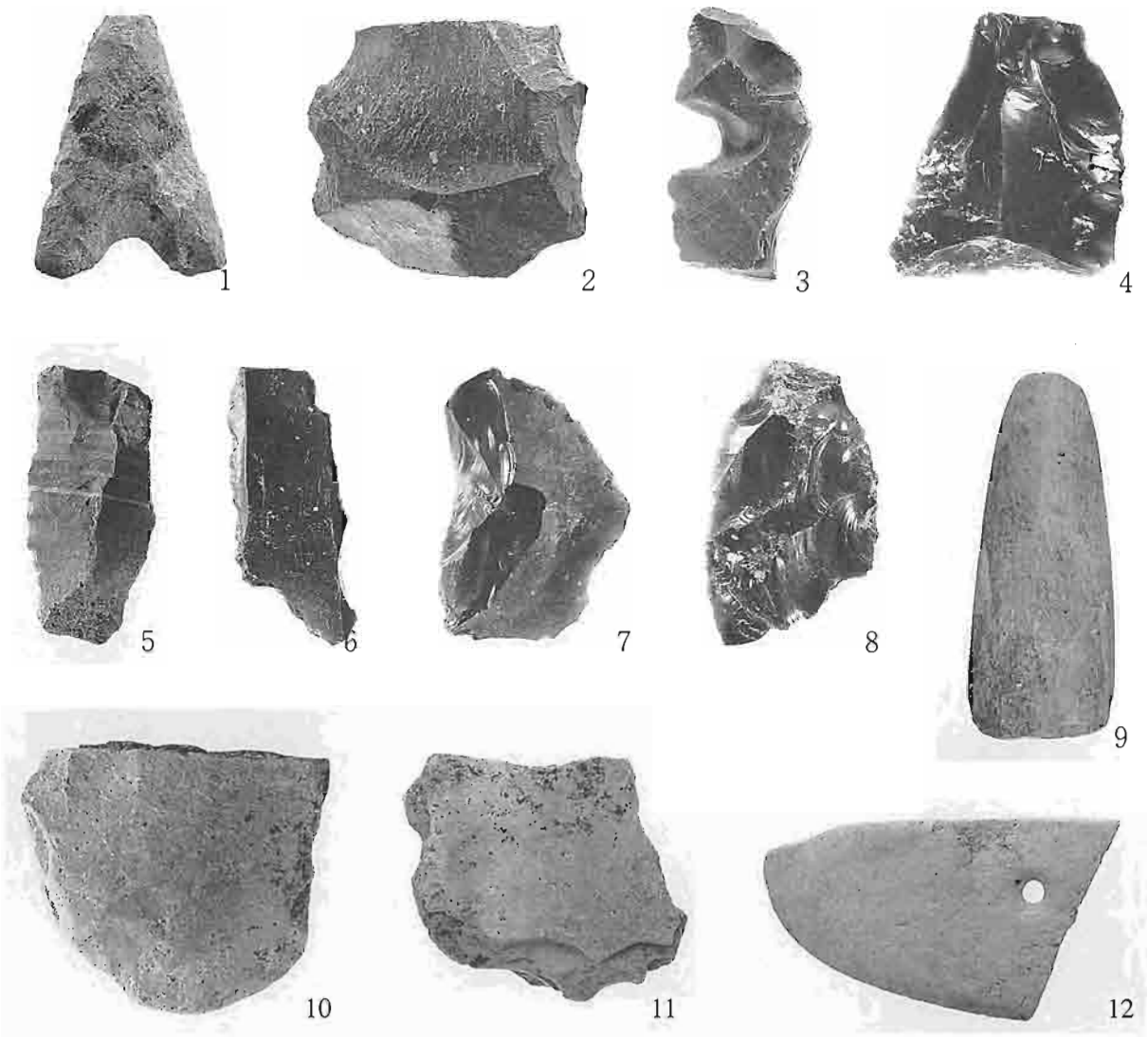
44


45

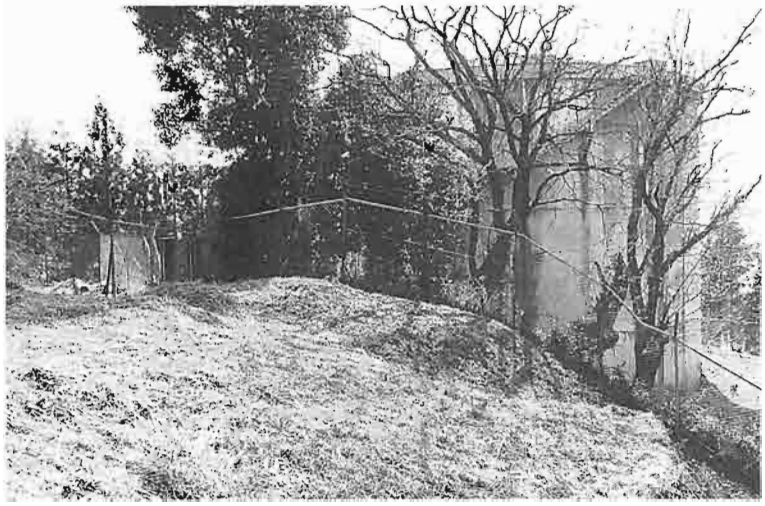
46

40～46　10号溝の出土土器

図版14



1～12　C区の出土石器



（上）鳥羽塚古墳の現況写真（北西より）
（右）同古墳出土の土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	よ そ みや い せき
書　　名	会 所 宮 遺 跡
副 書 名	日田市埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	第11集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	土居和幸・行時志郎・永田裕久
編 集 機 関	日田市教育委員会
所 在 地	〒877 日田市田島２丁目６－１　ＴＥＬ.０９７３－２２－８２３２
発 行 機 関	日田市教育委員会
発行年月日	西暦１９９６年１２月２８日

ふりがな 所収遺跡名		ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
会所宮	A区	日田市大字日高 字後山					19900621 ～19900806	250 m²	道路建設
	B区	日田市大字田島 字其田					19920506 ～19920527	770 m²	〃
	C区	日田市大字田島 字中ノ手					19960311 ～19960424	750 m²	〃

所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
会所宮	A区	集落跡	古代～中世	溝２ 柵列１	土師器・陶磁器 土錘・鉄刀	
	B区	水田？ 包含層	弥生時代 古墳時代 中世	溝４ 土坑６ 包含層	弥生土器・須恵器 土師器・陶磁器 石器	
	C区	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居１ 土坑10 溝９	弥生土器 須恵器	

会所宮遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第11集

編　集　日田市教育委員会
発　行　〒877 日田市田島2丁目6-1
TEL.0973-22-8232
発行年　平成7年12月28日
印　刷　山本印刷有限会社
〒877 日田市新治町472－1